長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第一九集

二〇〇〇　財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第 19 集

２０００

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第１９集

２０００

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

当財団は昭和57年に設立されてから18年、市域のみならず乙訓地域の歴史と文化を掘り起こす努力を続けてまいりました。そして、少しずつではありますが長岡京市の固有で豊かな歴史や文化、自然環境が明かとなってきました。こうした成果は調査研究や報告書、啓発事業などの形で、市民の方々に逐次お知らせしてきたところです。

21世紀を目前にしている今、新世紀を担う次世代の育成と充実した生涯学習の環境整備が大きな課題となっており、学校教育や地域学習のなかで先人たちが築き上げてきた歴史や文化の果たす役割りはますます大きくなっています。

本報告書は、平成８年度から３カ年にわたって調査してまいりました、都市計画道路・今里長法寺線整備事業のまとめとして刊行するものです。過去３回の調査の概要は、各年度毎に報告してまいりました。ここに報告しますのは、これまでの調査で出土した遺物に関するものです。既刊の８集・12集・17集と合わせてご覧ください。

今里遺跡は、旧石器から近世に至る、市内でも有数の複合遺跡です。特に奈良時代以降は、郡名寺院である乙訓寺が建立されるなど、乙訓地域の中心的な位置を占めるに至ります。今回の一連の調査でも、複数の時代の遺構・遺物が検出されているほか、長岡京の条坊側溝も検出されるなど、多くの成果があげられました。

これらの成果は、地域の歴史を解明する資料であるばかりでなく、市民の皆さんにとっての大切な財産であり、明日を託す子供達が郷土を理解する貴重な学習教材でもあります。そして、私たちの使命は今後の更なる研究と活用であると心得ます。

最後になりましたが、現地調査から整理・報告作業に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の方々に厚くお礼申しあげますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成１２年１１月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京市の都市計画道路新設に伴う事前の発掘調査として長岡京市今里西ノ口および今里五丁目において行った、長岡京跡右京第544次調査（1996(平成８)年)、長岡京跡右京第580次調査（1997(平成９)年)、長岡京跡右京第650次調査（1999(平成11)年）の調査概報である。

2．本書は、「今里長法寺線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の整理報告」として長岡京市建設部広域道路課の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。遺物整理作業は、現地調査と同様に同センター調査係岩崎　誠、中島皆夫が担当した。

3．本書の記述は出土遺物を中心に行ったが、検出遺構の報告は『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第８集、第12集、第17集として既に公刊している。

4．対象となった遺跡は、長岡京跡の右京四条三坊九町・十五町・十六町および今里遺跡である。

5．各調査の正式名称は調査次数と調査地区名を併記したもので、長岡京跡右京第544次調査の場合、長岡京跡右京第544次（７ＡＮＩＮＣ－７地区）調査となる。長岡京跡の調査次数は右京域での通算調査件数を示す。また、調査地区名は前半が奈良国立文化財研究所の分類表示、後半が高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』(1977年）の旧字名による地区割りと小字西ノ口での調査回数を意味する。

6．本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。

7．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

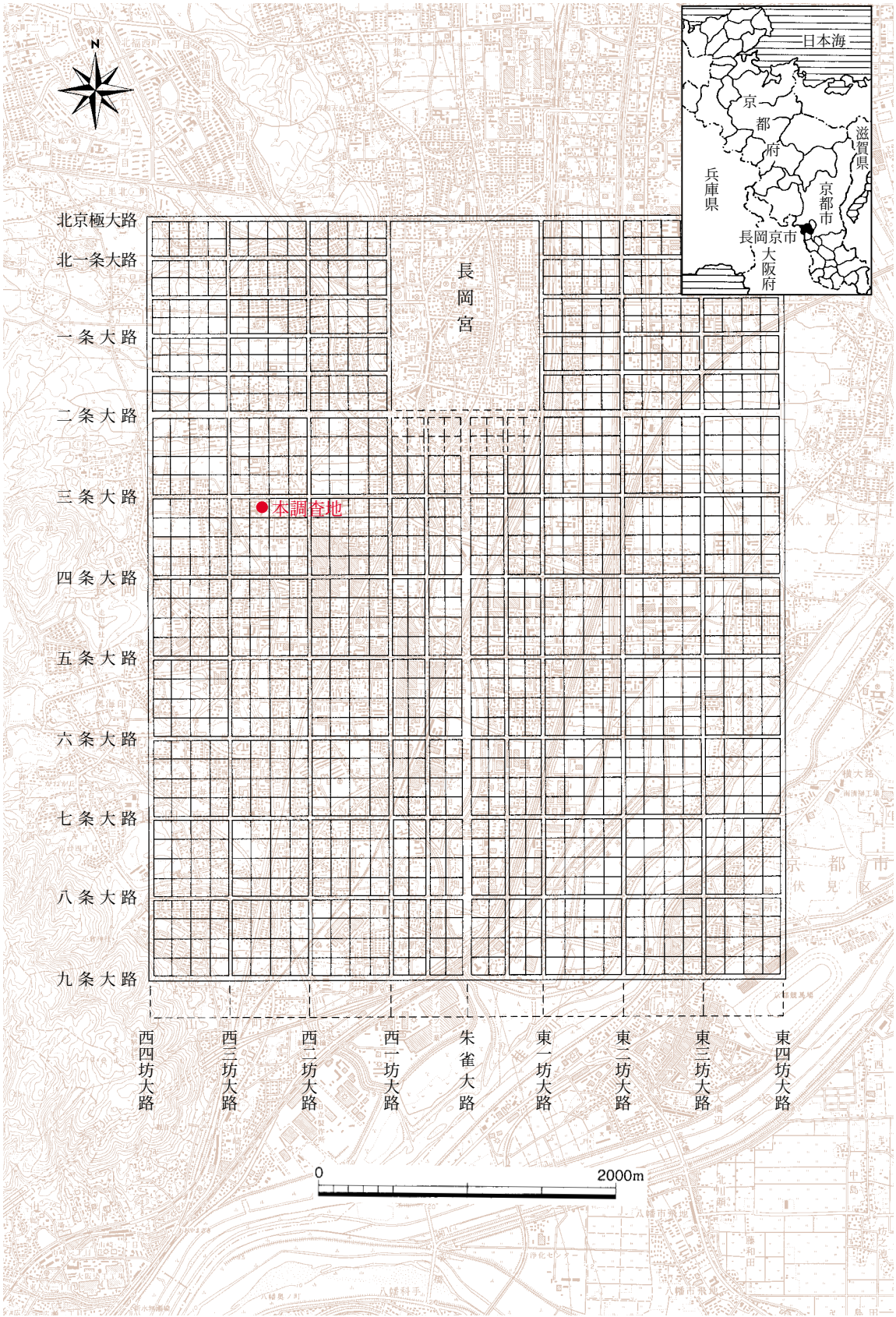
8．整理作業には、技術補佐員・調査補助員・整理員の参加、協力を得た。
　遺物写真は、西大寺フォト　杉本和樹氏に撮影を依頼した。

9．本書は岩崎、中島が分担して執筆および編集を行い、文末に名を記した。なお、火山ガラスの分析については檀原　徹氏（株式会社京都フィッション・トラック）の報告を掲載した。

※　本書表紙のカットは右京第544次調査出土のナイフ形石器（池庄司淳作図）

付表―１　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所　在　地	現地調査期間	面　積	備　考
長岡京跡右京第544次	7ANINC-7	長岡京市今里西ノ口15-2～3・16-8 今里五丁目315-4～6・316-1	1996年10月１日 ～ 1996年12月19日	474㎡	
長岡京跡右京第580次	7ANINC-8	長岡京市今里五丁目310-2他	1997年９月24日 ～ 1997年12月19日	315㎡	３調査区に分割して調査
長岡京跡右京第650次	7ANINC-10	長岡京市今里五丁目327-2他	1999年８月17日 ～ 1999年12月１日	330㎡	５調査区に分割して調査



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

序　　文……i
凡　　例……ii
1　はじめに……1
2　調査経過……2
3　検出遺構……2
4　右京第544次調査の出土遺物……5
（1）旧石器時代の遺物
（2）弥生時代の遺物
（3）古墳時代の遺物
（4）飛鳥時代の遺物
（5）奈良時代の遺物
（6）長岡京期の遺物
（7）平安時代の遺物
（8）鎌倉～室町時代の遺物
（9）江戸時代以後の遺物
（10）その他の遺物
5　長岡京跡右京第544次（7ＡＮＩＮＣ―7地区）今里遺跡発掘
調査土壌中の火山ガラスの分析結果報告書……16
6　右京第580次調査の出土遺物……21
（1）旧石器時代～平安時代の遺物
（2）鎌倉時代の遺物
（3）江戸時代以後の遺物
7　右京第650次調査の出土遺物……25
（1）弥生時代の遺物
（2）古墳時代から奈良時代の遺物
（3）長岡京期の遺物

（４）平安時代の遺物

（５）鎌倉時代～室町時代の遺物

（６）江戸時代以後の遺物

８　ま　と　め……36

（１）旧石器時代

（２）古墳時代

（３）長岡京期

（４）鎌倉時代から室町時代

図　版　目　次

長岡京跡右京第544次（７ＡＮＩＮＣ―７地区）調査

図版　１　出土遺物―１
図版　２　出土遺物―２
図版　３　（１）弥生～古墳時代の土器―１
　　（２）弥生～古墳時代の土器―２
図版　４　（１）弥生～古墳時代の土器―３
　　（２）古墳～飛鳥時代の土師器―１
図版　５　（１）古墳～飛鳥時代の土師器―２
　　（２）古墳～飛鳥時代の須恵器
図版　６　（１）奈良時代～長岡京期の須恵器
　　（２）長岡京期以後の遺物
図版　７　（１）石器類・土製品
　　（２）砥石・軒瓦・銭貨

長岡京跡右京第580次（７ＡＮＩＮＣ―８地区）調査

図版　８　井戸ＳＥ16出土の土師器・瓦器
図版　９　井戸ＳＥ16出土の瓦器
図版　10　（１）井戸ＳＥ16出土の土師器・瓦器・須恵器
　　（２）井戸ＳＥ16の出土遺物
図版　11　（１）溝ＳＤ19最下層出土の瓦器
　　（２）出土遺物

長岡京跡右京第650次（７ＡＮＩＮＣ―10地区）調査

図版　12　弥生時代から古墳時代の遺物
図版　13　（１）溝ＳＤ08出土の土師器・須恵器・製塩土器
　　（２）土馬
　　（３）溝ＳＤ08出土の軒平瓦
図版　14　溝ＳＤ08出土の土師器・須恵器・土錘
図版　15　平安時代から室町時代の遺物

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）　……iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）……1
第３図　検出遺構変遷図（1/600）……3

長岡京跡右京第544次（７ＡＮＩＮＣ―７地区）調査

第４図　弥生土器拓影図（1/2）……6
第５図　弥生～古墳時代の土器（1/4）……9
第６図　溝ＳＤ34出土古墳時代の土器実測図（1/4）……9
第７図　石器・石製品実測図（1/2・1/4）……11
第８図　古墳時代以後の遺物実測図（1/4）……13
第９図　軒瓦実測図（1/4）……15
第10図　火山ガラス屈折率データシート（１）……19
第11図　火山ガラス屈折率データシート（２）……19
第12図　火山ガラス屈折率データシート（３）……20

長岡京跡右京第580次（７ＡＮＩＮＣ―８地区）調査

第13図　須恵器片実測図（1/4）……21
第14図　井戸ＳＥ16出土遺物実測図（1/4）……23
第15図　溝ＳＤ19他出土遺物実測図（1/4）……24

長岡京跡右京第650次（７ＡＮＩＮＣ―10地区）調査

第16図　土坑ＳＫ22出土遺物実測図（1/2・1/4）……25
第17図　溝ＳＤ51・土坑ＳＫ49出土遺物実測図（1/2・1/4）……27
第18図　竪穴住居ＳＨ14・土坑ＳＫ23・56出土遺物実測図（1/4）……29
第19図　出土遺物実測図（1/2・1/4）……29
第20図　溝ＳＤ08出土遺物実測図（1/4）……31
第21図　土坑ＳＫ05・06出土遺物実測図（1/2・1/4）……33
第22図　井戸ＳＥ17・溝ＳＤ16・34出土遺物実測図（1/4）……34

付　表　目　次

付表―１　本書報告調査一覧表 ……ii

長岡京跡右京第544次（７ＡＮＩＮＣ―７地区）調査

付表―２　保存用試料一覧表……18
付表―３　全鉱物組成分析結果一覧表 ……18
付表―４　火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 ……18

ま と め

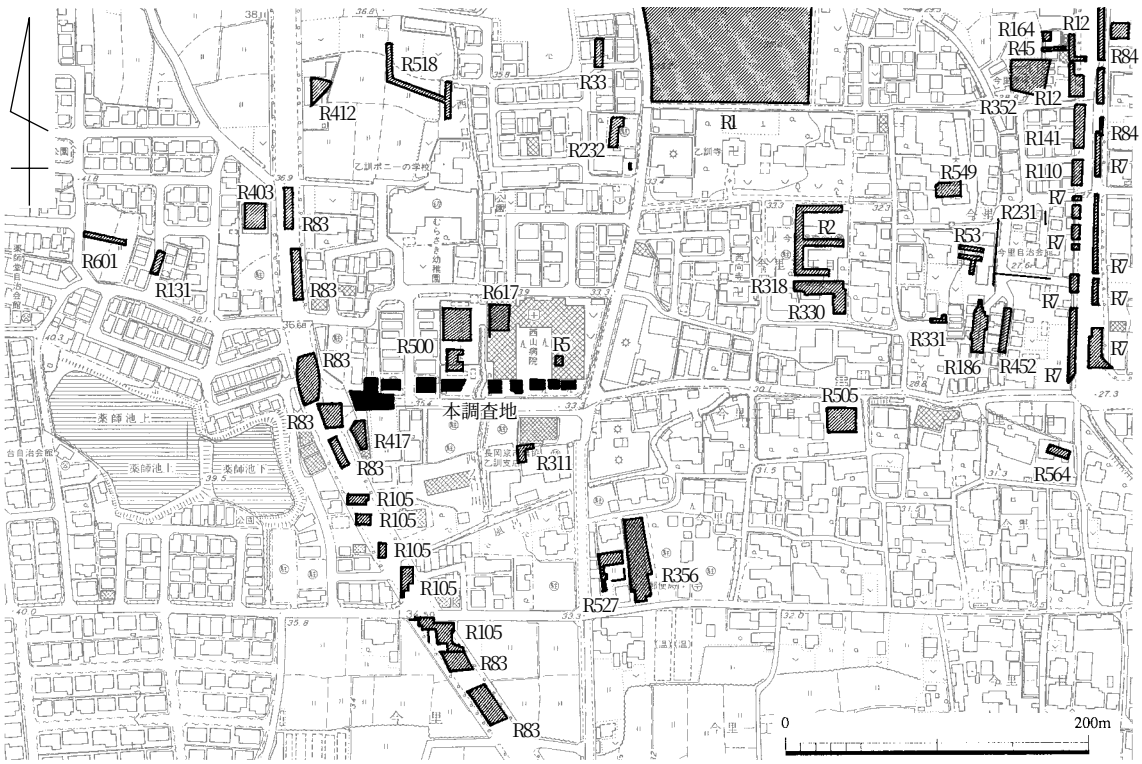
付表―５　報告書抄録……40

1　はじめに

調査地は京都府長岡京市今里西ノ口、今里五丁目に所在し、阪急京都線長岡天神駅の北西約1.2㎞に位置する。周辺の地形は緩扇状地に分類されるが、調査地の南には扇状地から段丘を貫く開析谷が存在する。調査地西側の薬師池上池と下池はこの開析谷を堰き止めて築かれており、長法寺方面から流れる山ノ下川の水を引き込み、東の風呂川に落としている。また、調査地域のほぼ中央には西ノ口川が井ノ内方面から南流し、南方で風呂川と合流している。周辺は1950年代以降の急速な宅地化などによって、現在では旧地形を推測することが困難である。

調査地は長岡京跡および今里遺跡の推定範囲に含まれる。長岡京跡の条坊復原案では右京第544次調査が右京四条三坊十五町・十六町、右京第580次調査が右京四条三坊十六町、右京第650次調査が右京四条三坊九町にあたる。また、付近には四条条間北小路と西三坊坊間西小路を推定することができる。一方の今里遺跡は旧石器時代から連綿と続く複合遺跡で、調査地は推定範囲内の南西部に位置する。また、調査地の北東200ｍには乙訓寺が所在している。

西ノ口川より西側の地域では、右京第83・105次調査[注1]や右京第403[2]・412[3]・417[4]・500[5]次調査が行われ、縄文時代から江戸時代までの遺構が確認されている。なかでも、奈良時代は多数の掘立柱建物が検出され、「次官」墨書土器が出土するなど注目すべき成果がある。西ノ口川より東側の地域では右京第5[6]・311[7]・617[8]次調査などが行われ、鎌倉時代の柱穴や土坑が多数検出されている。また、右京第356[9]次調査では、戦国時代に築かれた今里城の堀や井戸が検出され、土器や木製品が大量に出土している。



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

2　調査経過

本調査は、長岡京市の都市計画道路新設事業に伴って実施した発掘調査である。この事業に伴う発掘調査は1996年度に右京第544次調査、翌1997年度に右京第580次調査、そして、1999年度に右京第650次調査として実施した。調査地の位置は右京第544次調査が最も西にあり、順次東側に移して行われた。面積は右京第544次調査の474㎡が最も大きく、３回の調査を合わせた総面積は1119㎡を測る。いずれの調査地にも盛土が施されており、調査は厚さ１m前後の盛土層の除去より着手した。各調査で検出した遺構については、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』の第８集（1997年）に右京第544次調査を、第12集（1998年）に右京第580次調査、第17集（2000年）に右京第650次調査の内容を報告している。しかしながら、各報告書では出土遺物に関しての考察を行えなかったため、今回「今里長法寺線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の整理報告」として上記３調査の出土遺物整理作業の成果をまとめることになった。

3　検出遺構

ここでは各調査で検出した遺構の概略を示す。検出遺構の詳細については、既に公刊した『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第８集、第12集、第17集をご参照願いたい。

（１）右京第544次調査の検出遺構

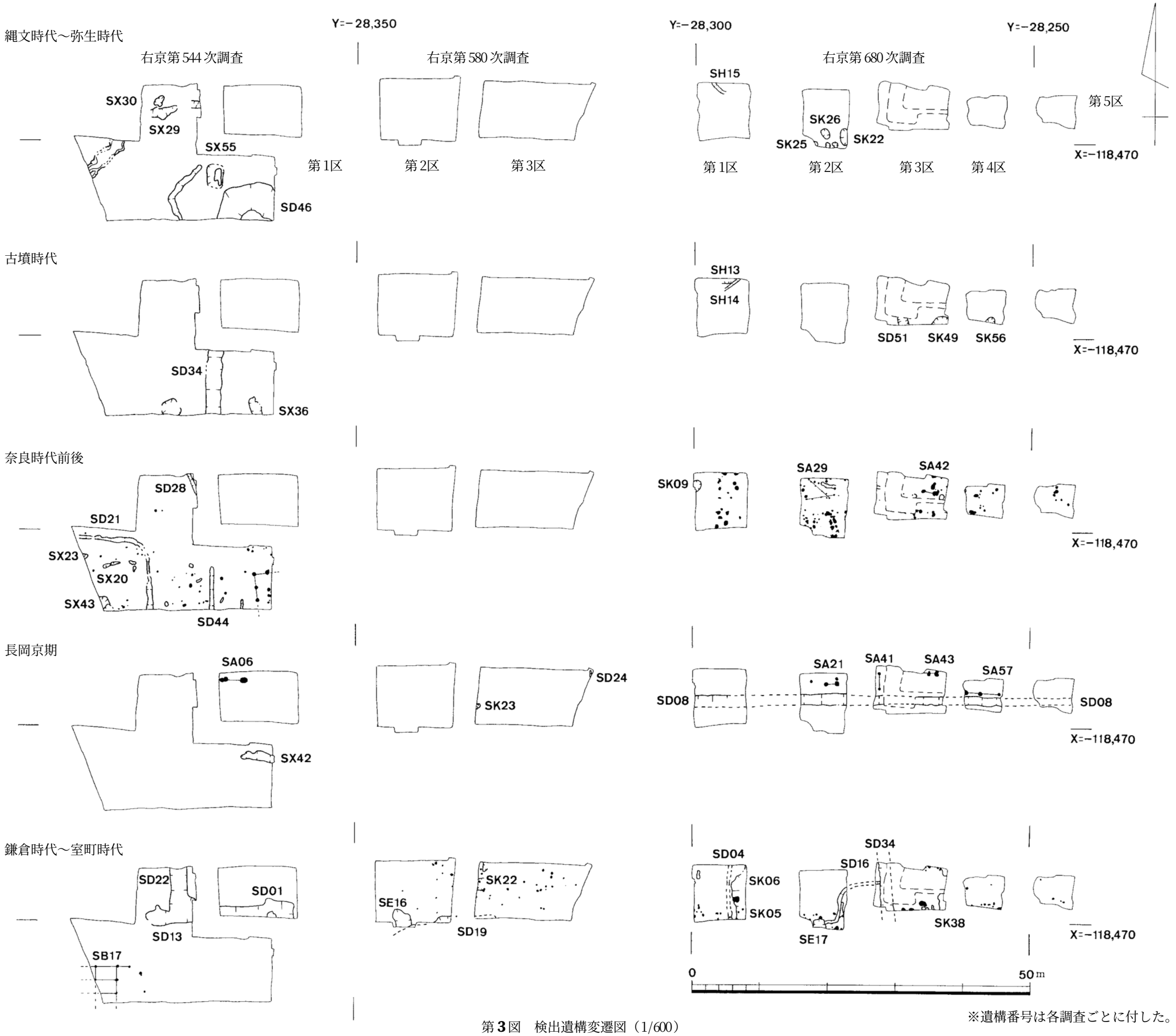
右京第544次調査では縄文時代の流路、弥生時代の土坑、古墳時代の溝・土坑、飛鳥～奈良時代の溝・掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物、安土桃山時代の溝などを確認した。このうち、古墳時代の溝は中期後半に機能を停止したと考えられ、埋土からは大量の土器類が出土している。また、安土桃山時代の溝は今里集落を囲む環濠ないしは今里城に関連する堀の可能性が考えられた。断面観察では旧石器時代の単純包含層と火山灰を含む層が確認されるなど大きな成果が得られた。

（２）右京第580次調査の検出遺構

奈良時代の柵、長岡京期の土坑・溝、鎌倉時代の井戸・土坑・溝、室町時代の溝、江戸時代の溝・柱穴などを確認した。とくに、第２区で検出した鎌倉時代の井戸からは土師器、瓦器などが大量に出土した。また、第１区の室町時代の溝は右京第544次調査で確認した溝と一連のものと考えられ、溝が東方向へ延びることを明らかにした。奈良時代より新しい時期の遺構面である黄褐色土層からは旧石器時代の剝片資料も出土した。

（３）右京第650次調査の検出遺構

弥生時代と古墳時代の竪穴住居・土坑、奈良時代前後の柵・土坑、長岡京期の四条条間北小路北側溝・柵、鎌倉時代の井戸・溝・土坑、江戸時代の溝・土坑などを確認した。四条条間北小路は右京第83次調査で北側溝が検出されていたが、右京第544・580次調査では確認できていなかった。右京第650次調査の第１～４区で検出したことで、右京第544・580次調査地では条坊側溝が完全に消滅するような削平を受けていたことが明らかとなった。　（中島　皆夫）



第3図　検出遺構変遷図（1/600）

※遺構番号は各調査ごとに付した。

４　右京第544次調査の出土遺物

（１）旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物には、ナイフ形石器と剝片がある（第７図、図版７（１）87～91）。87はサヌカイト製の横長剝片を用いたナイフ形石器である。ネガティブ剝離面が５面ある正面と、ポジティブ大剝離面のみの裏面があり、ポジディブ剝離の打面を裏面から正面方向に細かく連続して加工し、打点を完全に剝ぎ落してナイフ形石器の背部としている。刃部の約３分の２には、刃潰しと見られる剝離が正面側に見られる。残る刃部には非常に細かい刃こぼれが見られ、使用痕の可能性がある。88は、サヌカイト製の縦長剝片を使っている。３面のネガティブ剝離面をもつ正面と、縦長のポジティブ大剝離面のみからなる裏面があり、縦長大剝離面の打点側には２面のネガティブな狭い打面を残す。縦長剝片の両側辺の約３分の２を裏面側から刃潰ししている。89は正面・背面ともに打点を残すサヌカイト製の剝片で、ポジティブ面には打瘤が盛り上がっている。打面は幅約３㎜の細長い平坦面を残す。90は２面のネガティブ面と、ポジティブ面のみの裏面からなるサヌカイト製の剝片である。正面の剝離における打点は、２面ともない。裏面を剝離した打面には幅６㎜前後の狭いネガティブ面を残し、打点が観察できる。先端の一部に凹凸のある礫面を残す。91は、２面のネガティブ剝離面の正面と、ポジティブ剝離面のみの裏面からなるサヌカイト剝片である。ポジティブ剝離面に打点を残し、打面は重なる打撃で荒れている。

各遺物出土遺構や層は、アカホヤ火山灰がわずかに検出された分析試料採取層の上下にわたっていた。87は第58層下面、または第66層上面出土。88は第66層下位から出土。89～91は第61層から出土した。火山灰分析は、第61層の上位試料、第62層の中位試料、第64・65層の下位試料の３試料で実施した。その結果、下位第64・65層で姶良丹沢火山灰が多く検出されたことから、第65層以下で出土した88～91は旧石器時代堆積土層からの出土と考えられる。88の出土層が、拳大礫を含む砂礫層であることから、生活面での出土とは考えにくい。しかし、石器や剝片の残存状況から、遠隔地から流されてきたものとも考えにくい。また数点の剝片が出土した事実は、このあたりを狩猟・生活域とする集団の存在が確実となった。

（２）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には、土器と石器がある（第４・５・７図、図版１・２、図版３（１）・（２）、図版４（１）、図版７（１）・（２）１～32・38～41・92～97・127～136）。弥生土器には中期の所産と後期（または古墳時代初期に下るか）の所産のものがある。中期の土器は、いずれも凹線文繁行期に限られ、壺・甕・鉢の口縁部や高杯柱状部などに多用されている。

壺は広口壺がほとんどである。18・39・41は口縁部端面を下方または上方に拡張し、凹線文を施している。40は口縁端部を上下に肥厚させて端面を作り、丁寧な強いナデを施して凹面をなす。22は口縁端部を下方に肥厚させた器壁の厚い個体で、飾らない広口壺の可能性がある。23は口縁部上端を上方に肥厚させたもので、21は口縁端部を肥厚させずにまるくおさめている。127は端部を下方に少し拡張し、端面を作り出している。体部の文様には櫛描直線文（４・６・７）や波

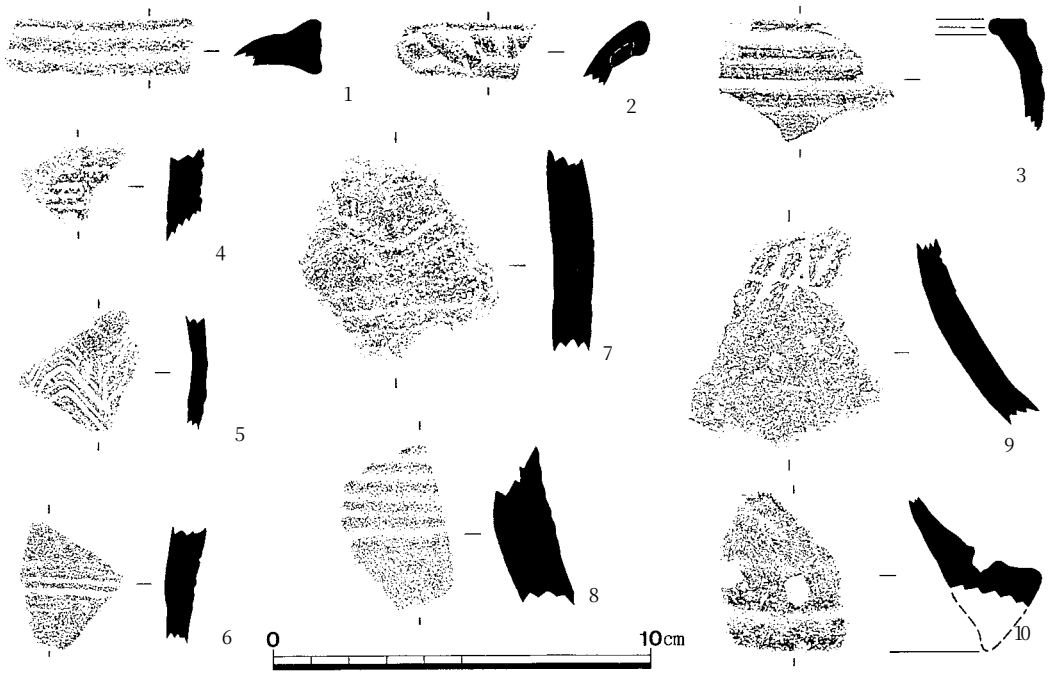
状文（５・７）がみられ、頸部に板状工具の刺突文が巡るもの（９）もある。底部は平底で、29・129は中型、26は大型の個体である。底部が突出し、底面の周縁部を幅広く残してくぼむもの（28）は後期か庄内期の所産であろう。30・136は小型品で、内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。136は甕になるのかも知れない。

甕は、頸部を「く」の字状に屈曲させ、短く開く口縁部をもち、口縁端部上方または上下を拡張させて作り出した端面に凹線文を施しているもの（１・38・131）と、受け口状に屈曲させた口縁部をもつもの（15・16・128）がある。前者の体部外面には平行タタキメが横方向に観察できるものがある（38）。後者は後期または庄内期の所産と考えられる。15には口縁部外面に列点文が巡る。底部には底面の外縁部を幅広く残してくぼむもの（17）と、外縁部を狭く残して深くくぼむもの（130）がある。15と17の底部は同一個体と考えられる。

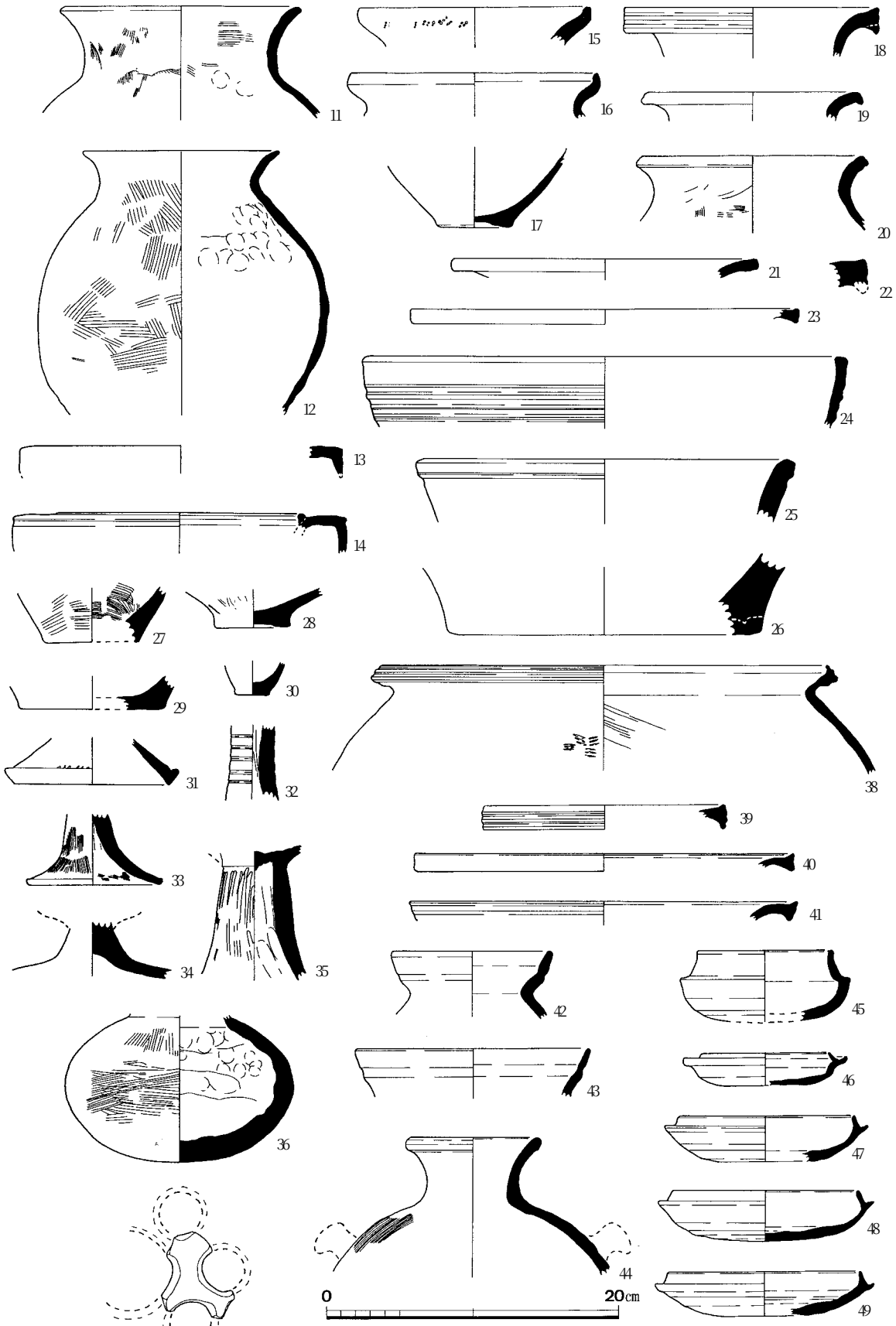
鉢は大型品の口縁部（24）と小型品の口縁部（３）がある。24は、体部から僅かに内湾しながら広がるもので、端部は水平な平坦面をもち、外面には５条の凹線文が観察できる。３は、体部径が端部径を凌ぐもので、端部内面側を肥厚させて水平な平坦面を作り出している。外面には４条の凹線文が観察できる。25も鉢になると思われるものであるが、類例を知らない。直線的に広がる体部に、上端外面側に低い台形状の突帯を巡らせ、口縁部としたものである。

高杯は、垂下する口縁部をもつものがあり（13・14）、脚部には柱状部に凹線文を施すもの（32）や施文しないもの（135）があり、裾端部を上方に肥厚させ端面を作り出しているもの（10・31）がある。10には裾端部近くの外面に棒状工具の刺突文が巡らされ、31にはヘラ状工具の刺突文が巡らされている。32は庄内期の所産かも知れない。

胎土の特徴をみると、橙灰白色に焼き上がり、石英・チャート・赤色粒子が目立つものが大多数をしめる。橙灰色で石英や白色砂粒の目立つもの（４・25・30）も少量ある。この他、器形や



第４図　弥生土器拓影図（1/2）



溝ＳＤ13－45　溝ＳＤ33－48　土坑状遺構ＳＸ36－36　土坑状遺構ＳＸ51－49
溝ＳＤ14－46　溝ＳＤ34－11～32　土坑状遺構ＳＸ42－39～41　土坑状遺構ＳＸ55－33～35
溝ＳＤ21－38　溝ＳＤ44－42～44　土坑状遺構ＳＸ43－37　柱穴Ｐ4－47

第５図　弥生～古墳時代の土器（1/4）

時期不明で、角閃石を多く含む底部片（133）がある。

各土器の出土遺構は、第５図に記したほか、１・３～10・127～129・131～134は溝ＳＤ34、２は土坑状遺構ＳＸ55、130は土坑状遺構ＳＸ51、135は柱穴Ｐ４からである。

石器には、凹基式のサヌカイト製打製石鏃が１点ある（92）。剝片は、珪質頁岩～珪質粘板岩製のもの（93）があり、石剣か石庖丁の未製品と考えられる。この他古墳時代の可能性もある砂岩製の砥石（94・96・97）や頁岩～粘板岩製の砥石（95）がある。

（３）古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には、土師器と須恵器がある。土師器には、庄内式段階のものと布留式段階のものがある（第５・６・８図、図版１、図版２、図版４（１）・（２）、図版５（１）、図版７（１）11・12・20・33～37・42・43・50～83・86・106・137～139）。須恵器には、Ⅰ期中葉とⅡ期後半のものがある（第５・６・８図、図版１、図版５（２）44・45・47～49・84・85・105・141）。土師器・須恵器とも継続する土器型式ではない。

庄内式土器段階の土器群には、甕・壺・高杯・器台・鉢などがある。一部については、前項で触れているので、それ以外の土器などについてみる。

壺には、短く外反して広がる口縁の端部を丸く処理したもの（11・12）と、端面をもつもの（20・51・52）、二重口縁の形態（54）がある。前者は体部内面をユビオサエやナデにより整形している。後者のうち51の体部内面は、屈曲する頸部までヘラケズリを施している。50は頸部から直線的に立ち上がる口縁部をもつもので、端部を尖り気味にまるく処理し、体部内面は屈曲する頸部までヘラケズリを施している。50・51は布留段階になるかも知れない。

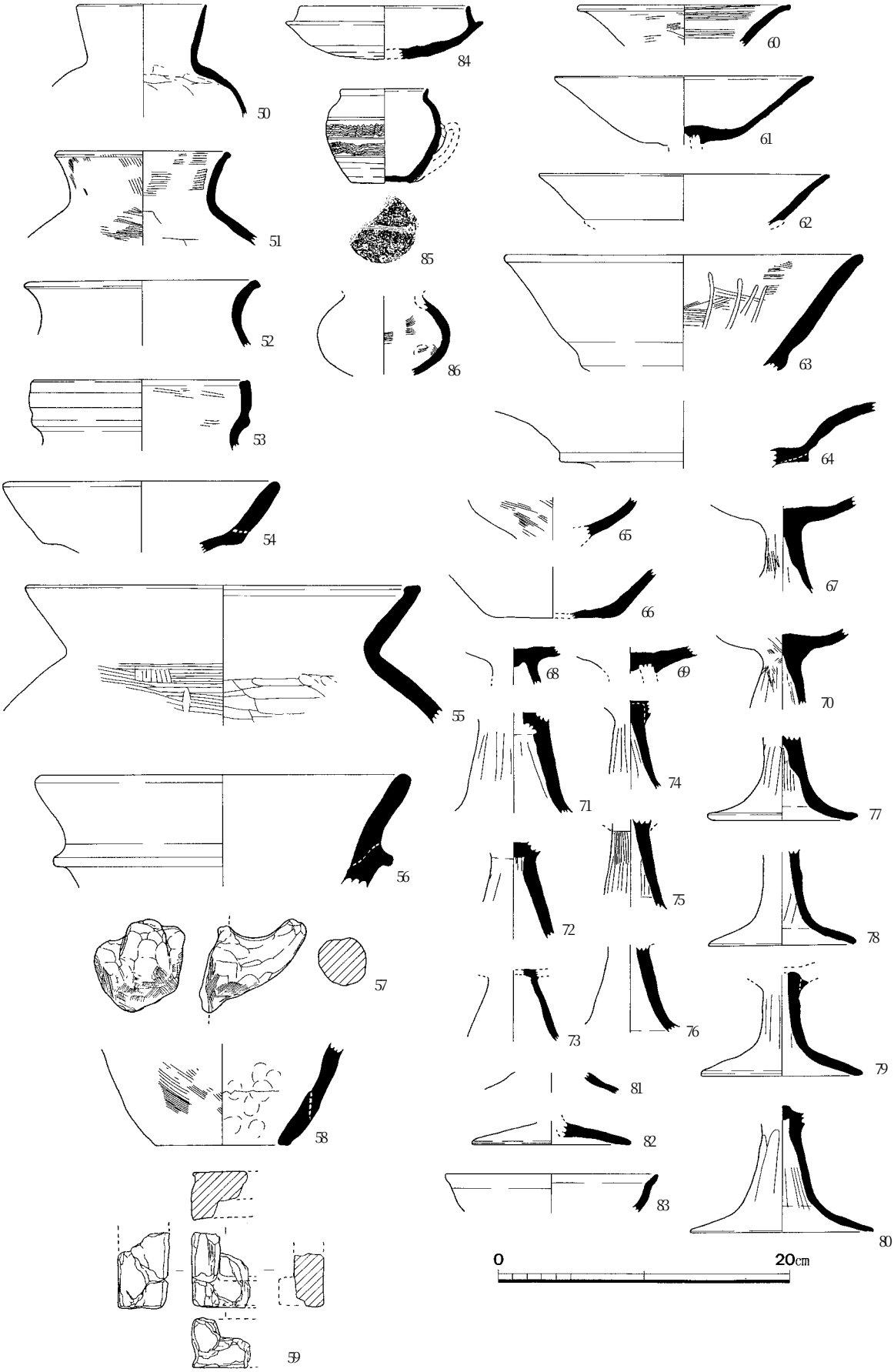
高杯には、短い柱状部から屈曲して水平近くにまで広がる裾部をもつもの（34）と、円筒形の柱状部から滑らかに広がる裾部をもつもの（35・73）がある。前者は半球形の杯部になるものと考えられる。

布留式土器段階の土器群には、壺・甕・高杯・鉢・小型丸底などがある。

壺には、滑らかに短く広がる口縁部をもつ形態（51）、直線的にのびる形態（50）、口縁部が屈曲して立ち上がる形態（42・43・53）がある。50・51については先述した。屈曲する形態のものはいずれも外反して広がる頸部に立ち上がる口縁部をつけたもので、口縁部下端を強く撫で、凹線文状にくぼませる。36は、口縁部形態は明らかでないが、器壁が非常に厚い球形体部をもつ。外面下半にヨコハケ、上半にタテハケを施し、内面には粘土紐巻き上げ痕を残す粗いナデを施している。

甕には、体部から「く」の字状に鋭く屈曲させて内湾気味に広がる口縁部をもつもので、端部をまるく処理したもの（138）、口縁端部を内側にわずかに肥厚させたもの（137）、端部の内側を肥厚させて幅広い端面を水平に作り出したもの（55）がある。55は大型品で、体部内面を頸部の屈曲部までヘラケズリしているにも関わらず器壁が厚い。

高杯は、皿状の杯部に大きく広がる口縁部をつけたもので、口縁部への移行が滑らかで境が不明瞭なもの（60・61・65～67・82）と、屈曲が鋭く稜線をなし、境が明瞭なもの（62～64）が



第６図　溝ＳＤ34出土古墳時代の土器実測図（1/4）

ある。63の杯部内面には幅広い放射状のヘラミガキが粗く施されている。脚は柱状部から外反して広がる裾部をもつもので、太い柱状部をもつもの（71・73）と、細い柱状部をもつもの（68～70・72・74～80）がある。前者は外面を丁寧に撫でているが、後者はハケメを残すものが多い。

鉢は、内湾する浅い体部に屈曲して短く広がる口縁部をもつもの（83）と、立ち上がり気味に外反する口縁部をもつもの（106）、内湾する浅い体部の端部をまるくおさめたもの（139）がある。

小型丸底は、球形の体部片（86）で、短く広がる口縁部をもつものと思われる。体部外面は丁寧なヘラミガキを施している。

甑と考えられるものには鍔を巡らすもの（56）、把手をもつもの（57）、底抜けの形態のもの（58）、底面に円形孔を数個配置するもの（37）がある。

特殊なものに、土製品（59）がある。破片であるため全体の形態はわからないが、平坦な四角い粘土板の周囲に断面四角形の突帯を巡らせたものと考えられる。浅く四角い箱状のものか、または器物の台であろうか。

これら土師器や土製品の胎土は、概ね橙灰白色から橙灰色で、赤色粒子を含むものがほとんどで、明赤褐色で白色砂粒が目立つもの（64）、砂粒が少ない粘土を用いたもの（72・76）なども少量ある。

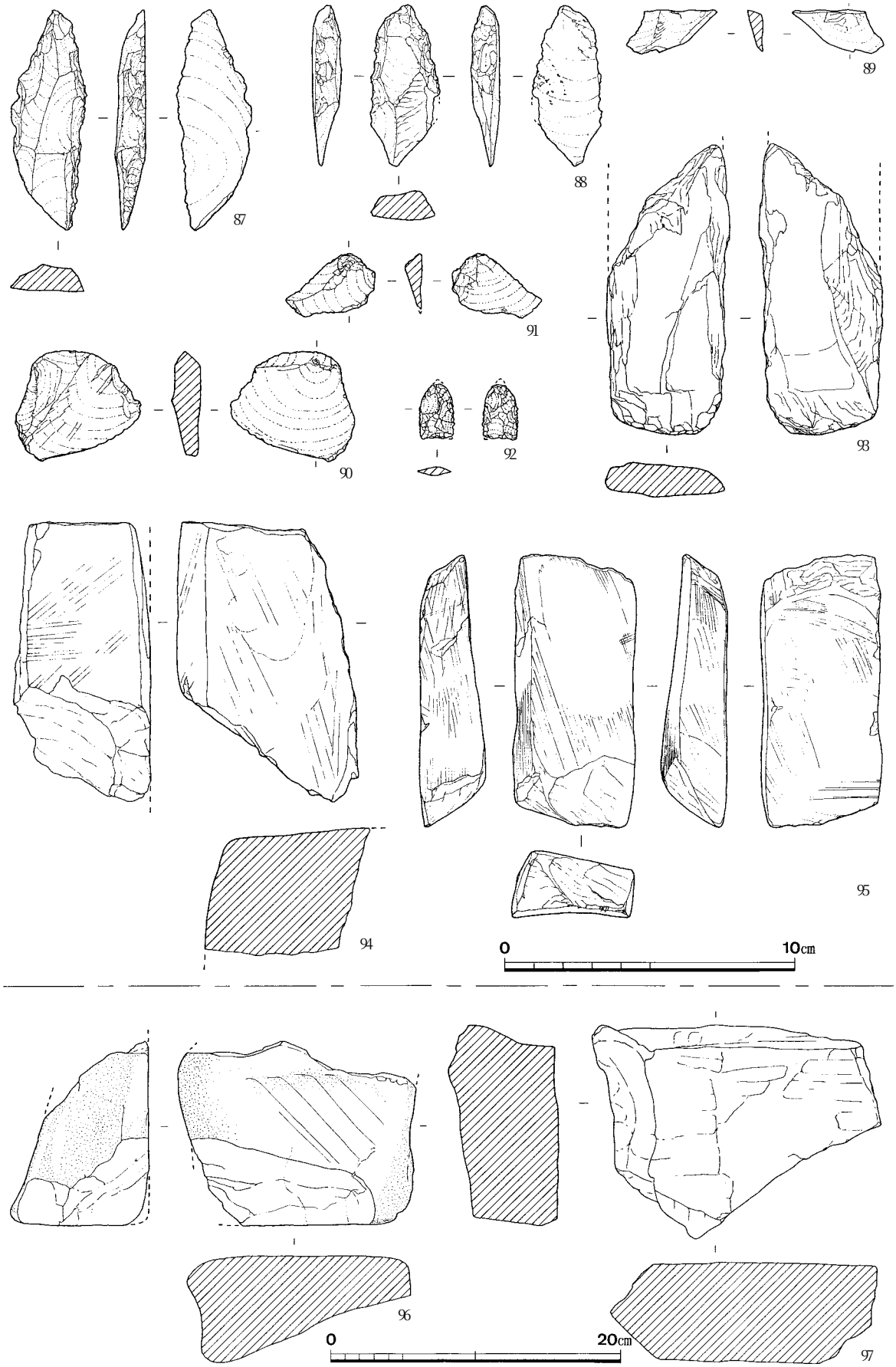
第５・６図以外に示した土器の出土遺構は、106が土坑状遺構ＳＸ42、137～139が溝ＳＤ34である。

須恵器は、５世紀後半段階の45・85・141と、７世紀初頭段階の47～49・84・105などがある。後者は飛鳥時代杯Ｈとして良いが、古墳時代から連続する器形としてここで扱う。

Ⅰ期の須恵器は３点ある。45の杯身は、身部が浅く内湾した椀状の器体で、立ち上がりは外反して垂直になるまで起き上がる。受け部は特に突出せず、身部器壁の厚さをそのまま利用し、身部端の内よりに立ち上がりを取り付けている。受け部端はわずかに凹面をなす。141の杯蓋は、口縁端部がわずかに凹面をなし、45の杯身の特徴と類似する。85は把手付椀で、平底の短頸壺のような形態をなす。体部最大径は上半部にあり、下半部に把手がつく。体部外面は３条の直線文で４段に区画し、上・下段を残した２段に波状文を巡らしている。把手は、施文後に粘土紐を張り付けたもので、接合部の装飾はナデ消されている。最下段の沈線文以下はケズリ整形の後、底面まで丁寧にナデ調整を施している。底面には直線のヘラ記号が刻まれている。

Ⅱ期の須恵器は多く、ほとんどは７世紀に含まれるものと思われる。器形には蓋杯・甕などがある。47～49・84は杯身で、立ち上がりは短く端部はまるい。105の杯蓋は、天井部と口縁部の境が強いナデによるくぼみだけで不明瞭になっている。端部は内面側に浅い沈線がみられるが、まるく処理している。44の提瓶は、６世紀後半の所産と思われる。

これら須恵器の色調は青灰色から暗青灰色に焼き上がっている。85の胎土には砂粒が目立たない特徴がある。他の製品には石英・長石などの砂粒が目立つ。第５・６図に示したもの以外の出土遺構は、105が土坑状遺構ＳＸ42、141が溝ＳＤ14からである。特筆すべき把手付椀（85）は、溝ＳＤ34出土の布留式土器群に重なり合いながら出土したもので、共伴関係にあると考えられる。



第７図　石器・石製品実測図（上＝1/2・下＝1/4）

（４）飛鳥時代の遺物

須恵器杯Ｈ・杯Ｇのほか長頸壺・横瓶・甕などがある（第５・８図、図版５（２）46・104・123・142）。46の杯Ｈは水平近くに広がった受け部に内傾する短い立ち上がりをつけたもので、端部は尖り気味にまるく処理している。口径8.7㎝、器高2.3㎝の小型品である。杯Ｈは104の身と、123・142の蓋がある。104は口径11㎝、器高3.1㎝を測る。蓋は逆刺をもつもので、両者とも摘みを欠損する。123は短い逆刺をもつもので、低い器高の形態である。口径は12.6㎝を測る。142の逆刺は大きく、器高も高いが、口径は９㎝前後に推定でき、123より小さい。

胎土や色調は、142が灰白色である以外、青灰色から暗青灰色で、石英・長石などの砂粒を含んでいる。

出土遺構は第５図に示した以外、104が溝ＳＤ42、123が溝ＳＤ22、142が土坑状遺構ＳＸ42から出土した。

（５）奈良時代の遺物

奈良時代と考えられる土器には須恵器が多く（第８図、図版６（１）100・143・145～147）、土師器もあると思われるが、細片になっており他の時期の遺物との区別が困難である。

須恵器には、杯Ｂ（145～147）・杯Ｂ蓋（100・143）・壺・甕などがある。

杯Ｂは、断面台形（145・146）または張り出した高台（147）を貼り付けており、高台貼り付け位置が、底部外縁より内側にあり、底部から滑らかに内湾して立ち上がる体部形態をもつものである。蓋は、口縁部を屈曲させず、端部を下方に折り曲げたもので、Ａ形態の口縁部をもつものである（100・143）。

胎土や色調は、143が灰白色で黒色粒子が目立つほか、青灰色から暗青灰色で、石英・長石砂粒を少し含む。

出土遺構は100が土坑状遺構ＳＸ32、143が掘立柱建物ＳＢ17Ｐ２、145～147が土坑状遺構ＳＸ07からである。

（６）長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には、土師器・須恵器・製塩土器・土製品・瓦がある（第８・９図、図版６（１）・（２）図版７（２）98・99・101～103・107～112・117～120・124・140・144・149・150・152～154・166）。

土師器には、椀（107～109）・皿・杯（110）・高杯（153）・甕（111）などがある。椀・杯はすべて外面ヘラケズリの手法で調整されている。153の高杯は、柱状部を棒巻き手法で作られたもので、外面を八面に処理している。111の甕は体部外面に粗いタテハケを、頸部から口縁部にかけてヨコナデを施している。体部内面はナデ、頸部から口縁部にかけての内面は横ナデが軽く、ヨコハケを残す。口縁端部は内面側に肥厚し、まるく処理している。都城型形態である。

色調・胎土は共通しており、淡橙色から橙色で、赤色粒子が含まれている。107～111は土坑状遺構ＳＸ42、153は土坑状遺構ＳＸ13、154は土坑状遺構ＳＸ23から出土した。

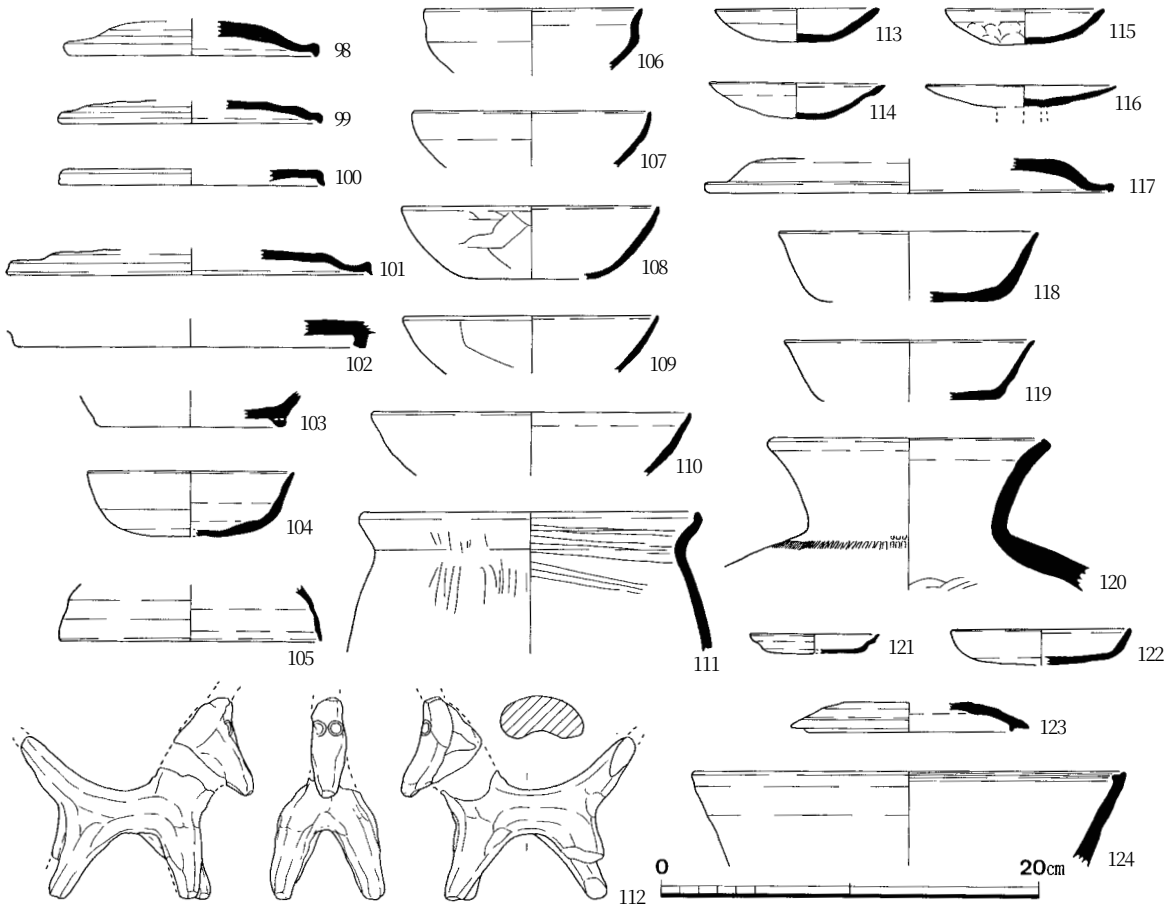
須恵器には、杯Ａ（118・119）・杯Ｂ（102・103・150）・杯Ｂ蓋（98・99・101・117・144）・

壺M（149）・壺L・甕（120・124）などがある。杯Aは口径13～13.6㎝、器高3.1～3.7㎝で、杯AⅡの法量区分に含まれる。杯Bは法量の知り得るものに恵まれなかったが、大型品（102）と中型品（103・150）がある。103は焼成が甘く、灰白色で、胎土の砂粒が殆ど目立たない。他は青灰色で、石英など砂粒が含まれている。壺Mは貼付高台をもつもの（149）である。甕は、外反する口縁部で、端面をもつもの（120）と、直線的に広がる口縁部で、端部を深い凹面に処理したもの（124）などがある。

98・99・101～103は土坑状遺構ＳＸ42、117～120は溝ＳＤ13から、124は土坑状遺構ＳＸ23、144は溝ＳＤ14、149は土坑状遺構ＳＸ07、150は中世包含層から出土した。

製塩土器（154）は、深鉢形になるものと思われ、口縁を内湾させて端部を尖り気味にまるくおさめる形態である。色調は橙灰色で、青灰色に変色する部分も広い範囲でみられる。胎土には石英・長石・チャートなどの大粒砂粒を含む。土坑状遺構ＳＸ23から出土した。他に溝ＳＤ13から、端部に面をもつ形態（図版４（２）140）も出土している。色調は明赤褐色で、胎土に石英・長石などの砂粒を多く含む。

土製品には土馬（112）があり、後ろ足先・尾の先端・頸部を欠損する。色調は橙灰色で、胎土に赤色粒子を含むが、精良な粘土が使われている。土坑状遺構ＳＸ42から大部分が、溝ＳＤ41から尾が出土した。



第８図　古墳時代以後の遺物実測図（1/4）

瓦は、丸瓦や平瓦が少量あり、軒丸瓦はなく、軒平瓦は166の１点だけであった。166は脇区に珠文を配さない特徴があり、均整唐草文の平城宮6721Ⅰ型式で、瓦当面の笵傷が著しい。色調は灰色で、表面黒色であった痕跡を残す。顎部の形態は、平城宮出土のものより小さく滑らかな曲線になっている。溝ＳＤ14から出土した。

（７）平安時代の遺物

平安時代の遺物には、緑釉陶器（図版６（２）160）と瓦（第９図、図版７（２）167）がある。土師器や須恵器、黒色土器と思われるものもあるが、所属時期や形態が明らかでない。160の緑釉陶器は、削り出し平高台の製品で、底面に焼成前のヘラ記号が線刻されている。色調は青灰色から橙灰色で、灰白色に発色した薄い釉が内面から底面にかけて全面に刷毛塗りされている。釉薬の色調は土中に埋没後の変色と考えられる。山城系緑釉陶器で、９世紀後半から10世紀前半の所産であろう。溝ＳＤ01から出土した。他に、椀体部片が溝ＳＤ13から１点出土している。この素地の色調は青灰色で緻密な胎土をなし、釉は内外面に薄く施され、色調はオリーブ灰色に発色している。

瓦には、軒平瓦（167）がある。他に平瓦なども少量あると思われるが、この時期の所産かどうか明確でない。167は剣頭文軒平瓦で、凹面に布目圧痕が残る。瓦当面が厚さ約1.5㎝と薄い。断面灰色、表面暗灰色に焼き上がり、やや軟質である。胎土には、石英・長石・チャートなどの砂粒が含まれている。溝ＳＤ14から出土した。鎌倉時代に下るかも知れない。

（８）鎌倉～室町時代の遺物

13世紀から16世紀の遺物には、須恵器、土師器、瓦器、陶器などがある（第８図、図版２、図版６（２）113～115・156～159・161～165）。

須恵器には、東播系の片口鉢など（161・164）がある。161は口縁部片で、端部を外面側に断面三角形に肥厚させた玉縁を呈する。164も片口鉢の体部片と思われる。外面側は、粘土紐単位の凹凸を残すナデ調整である。161は青灰色に硬く焼き上がり、164は灰色で、やや軟質である。161は溝ＳＤ22から、164は溝ＳＤ13から出土した。いずれも13世紀前後の所産と考えられる。

土師器には、皿（113～115）がある。113・114は口径8.8～9.2㎝、器高1.8～1.9㎝を測り、橙灰色で砂粒は少ない。115は口径8.4㎝、器高1.9㎝を測り、暗灰色で砂粒は少ない。溝ＳＤ13の下層で溝底から出土した。16世紀代の所産であろう。

瓦器には、椀（156～159）と皿の他、羽釜や鍋などがある。皿は小片で残りも悪く、調整手法や法量もわからないが、底部から滑らかに内湾して立ち上がる短い口縁部をもつもので、端部はまるく処理している。12世紀後半から13世紀頃の所産と考えられる。溝ＳＤ14と土坑状遺構ＳＸ15から各１点出土した。瓦器椀は、厚手の製品と薄手の製品があり、前者には、概して口縁部内面側に沈線を巡らせて端部を丸く処理し、内面のヘラミガキを密に施したもの（156～158）が多く、13世紀の所産であろう。後者は口縁端部を尖り気味にまるく処理し、内面のヘラミガキは細い原体で粗く施されている。後者の底部には断面三角形の低い高台が貼り付けられているものがある（159）。14世紀の所産であろう。165は三足羽釜の脚部である。上下を欠くので、形態は明

らかでないが、13世紀の所産と思われる。

156・157は溝ＳＤ13から、158は溝ＳＤ11から、159は溝ＳＤ13上層から、165は溝ＳＤ14から出土した。

陶器には、備前の擂鉢（163）などがある。片口の口縁部片であるが、端部を欠く。表面は暗灰色、断面は褐灰色で、硬く焼きしまっている。小片であるため、法量や形態の特徴はわからないが、16世紀の所産と考えられる。溝ＳＤ14から出土した。

（９）江戸時代以後の遺物

江戸時代以後の遺物には、土師器、陶磁器、銭貨などがある。

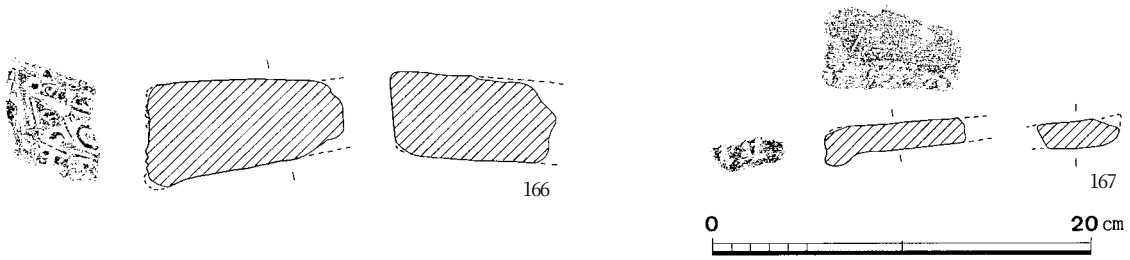
151（図版６（２））の土師器皿は、内面の底部と口縁部の境に沈線が巡る形態である。橙灰色に焼き上がり、胎土には石英・赤色粒子などの砂粒が目立つ。溝ＳＤ13の上層から出土した。

銭貨（図版７（２）168）の寛永通寶は「ス」寶と呼ばれる古寛永である。溝ＳＤ14出土。

この他、染付や瀬戸美濃系陶磁器などが、溝ＳＤ14などから出土している。

（10）その他の遺物

器形のわからない須恵器（図版６（１）148）や、小型高杯かと思われる須恵器（第８図、図版６（１）116）、所属時期のわからない炉壁（図版６（２）155）など、不明品がいくつかある。148は器壁の厚い小型品で、口縁部が焼き歪み、口径が割り出せないが、４㎝前後の直径になるものと思われる。頸部で屈曲してわずかに外湾しながら立ち上がる口縁部をもち、端部をまるくおさめている。体部外面は、下半をヘラケズリし、上半はロクロナデ調整である。装飾壺の肩部に置く壺のようにも思われる。色調は青灰色で硬く焼かれ、胎土には砂粒が目立たない。溝ＳＤ13下層から出土した。116は、偏平な円盤の外面中央に、蛇の目状に接合痕跡がみられる。接合痕跡の外縁直径は2.5㎝前後で、厚さ６㎜程度の輪状をなす。接合されたものは、高台なのか、環状把手なのか、脚部なのか、わからない。外面には灰被りによる器面の荒れや自然釉の付着がみられるが、接合痕から内側には焼成時の灰被りがみられない。このことから環状把手とは考えにくく、高台か脚部の欠損と考えるのが妥当と思われる。高台とした場合、器形バランスに違和感があり、高杯形を想定するのが自然であると考えられる。色調は青灰色から明青灰色で、硬く焼かれている。胎土には石英・長石などの砂粒や黒色粒子がみられる。溝ＳＤ13上層から出土した。155は橙灰色に発色した石英などの砂粒やスサを含む胎土で、表面が黒色にガラス化した溶融物で覆われている。ガラス化物質には気泡が多く含まれている。溝ＳＤ22から出土した。　（岩崎　誠）



第９図　軒瓦実測図（1/4）

5　長岡京跡右京第544次（７ANINC－７地区）今里遺跡発掘調査土壌中の火山ガラスの分析結果報告書

１、分析試料数は以下の通り。

試料名	１　今里西ノ口　上位	前処理	１
		全鉱物組成分析	１
		火山ガラスの屈折率測定	１
	２　今里西ノ口　中位	前処理	１
		全鉱物組成分析	１
		火山ガラスの屈折率測定	１
	３　今里西ノ口　下位	前処理	１
		全鉱物組成分析	１
		火山ガラスの屈折率測定	１
	合　計		３

２、処理行程について

（１）処理前

まず半湿潤状態の生試料で適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２ビーカー中で、数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度１～２％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用のメッシュ・クロスを用い、３段階の篩別（60、120、250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh（1/8～1/16㎜）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Ｎｄ＝1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

（２）全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の５項目について１薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

（３）火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整された120～250mesh（1/8～1/16㎜）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（ＲＩＭＳ）※（２）（３）を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として１試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データ数は巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が印刷され、Immersion Oil は測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率ｎｄの式は浸液温度から対応する屈折率を換算

するもの、ｎｄは屈折率、ｔは温度を示す。

温度変化屈折率測定法※（４）は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。（As.＋De.）／２は液温制御の際の上昇時（Ascent）と下降時（Descent）の平均値を意味する。繁雑を避けるためここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count, min, max, range, mean, st. dev, skewness はそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。＊一つが１個の火山ガラス片の測定結果を示す。

以　上

注１）吉川秀作（1976）：大坂層群中の火山灰層について・地質学雑誌．82（８），479－515．
２）横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究．25（１），21－30
３）Danhara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992) : An improved syatem for measuring refractive index using the thermal immersion method.
Quaternary International, 13/14, 89-91
４）檀原　徹（1993）：温度変化型屈折率測定法．日本第四紀学会編．第四紀試料分析法２．研究対象別分析法．149-157．東京大学出版会．
#　PAT. 1803336, 1888831

1997年１月26日
（株式会社　京都フィッション・トラック）

以上の分析結果により、以下のように集約できる。

１、各試料中の含有火山ガラスは１～２％とわずかである。したがって各試料は火山灰試料とはいえないが、火山ガラスは確認されたことになる。

２、各試料中の火山ガラスは偏平なバブル・ウォール型ガラスを主とし、屈折率などの特徴からＡＴおよびアカホヤガラスと判断される。

３、ＡＴとアカホヤガラスの含有比は、上位でアカホヤが多く、逆に下位ではほとんどがＡＴで、アカホヤはほぼ含まれない状態となっている。

1997年１月25日
（檀原　徹）

付表－２　保存用試料一覧表

NO.	試　料　名	処理生試料乾燥重量（g）	篩別試料重量（g）			色調判定	備　　考
			＞1/4㎜	1/4～1/8㎜	1/8～1/16㎜		
1	今里西ノ口 上位	24.9	7.08	2.28	1.69		
2	今里西ノ口 中位	25.5	1.27	0.39	2.33		
3	今里西ノ口 下位	25.7	10.87	2.62	1.22		

注．１）表中の数字は保存試料の重量を示す。
２）1/8～1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
３）色調判定は、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）による。

付表－３　全鉱物組成分析結果一覧表

NO.	試　料　名	粒子含有数（%）※（１）						備　　考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
1	今里西ノ口 上位	3	193	4	－	－	200	火山ガラスはバブル・ウオール型を主とし、少量の色付glも含む。 軽鉱物は斜長石・石英が主。少量のアルカリ長石も含む。 重鉱物はGHoが主。他にOpx, Opq, Zr含む。
		1.5	96.5	2.0	0.0	0.0	100.0	
2	今里西ノ口 中位	2	194	4	－	－	200	火山ガラスはバブル・ウオール型を主とし、少量の色付glも含む。 軽鉱物は斜長石・石英が主。少量のアルカリ長石も含む。 重鉱物はGHoが主。他にOpx, Cpx, Opqを含む。
		1.0	97.0	2.0	0.0	0.0	100.0	
3	今里西ノ口 下位	2	190	8	－	－	200	火山ガラスは無色透明のバブル・ウオール型で含有は少量。少量の色付きglも含む。 軽鉱物は斜長石・石英・カリ長石が主。 重鉱物はGHo, Biが主。他にOpc, Opq, Cumを含む。
		1.0	95.0	4.0	0.0	0.0	100.0	

注．※（１）上段　計測粒子数　下段　%
なお測定は、＃120～＃250粒径の粒子を対象としている。

付表－４　火山ガラスの屈折率測定結果一覧表

NO.	試　料　名（Sample name）	屈折率範囲（range）		屈折率平均値（mean	測　定個体数（個）	屈折率最頻値（mode）	火山ガラス形態（glass type）
		最小	最大				
1	今里西ノ口 上位	1.497	1.500	1.4982	9	1.510≦Nd＜1.512 ＊40％	H, C型
		1.509	1.513	1.5110	11		
2	今里西ノ口 中位	1.497	1.500	1.4985	14	1.497≦Nd＜1.500 ＊65％	H, C型
		1.509	1.511	1.5106	6		
3	今里西ノ口 下位	1.497	1.499	1.4982	19	1.497≦Nd＜1.499 ＊80％	H型 C, lt型
		－	－	1.5109	1		

※全火山ガラスに対するmode範囲中にある火山ガラスの含有を示す。
※H：扁平型　　C：中間型　　T：多孔質型（吉川，1976）　　lt：不規則型

＊＊＊ Grouping Data Sheet ＊＊＊　97/01/24 17:37:13

Series Name : ナガオカキョウシ
Sample Name : 1. イマザトニシグチ　ジョウイ
Analist : Yamashita
Material : VG
Immersion Oil : No.38（Nd=1.51907 - 0.000393･t）

（Ascent+Descent）/2

Group. 1
1.4967 1.4973 1.4975 1.4979 1.4985 1.4986 1.4987 1.4990 1.4996
Group. 2
1.5094 1.5101 1.5102 1.5104 1.5105 1.5110 1.5113 1.5115 1.5118 1.5120 1.5127

	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1 :	9	1.4967	1.4996	0.0029	1.4982	0.0009	-0.1446
Group. 2 :	11	1.5094	1.5127	0.0033	1.5110	0.0010	0.1217
Total :	20	1.4967	1.5127	0.0160	1.5052	0.0066	-0.1770

＊＊＊ Histogram ＊＊＊ ＊=1

```
                  0         10        20        30        40        50        60
---------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
1.490=<Nd<1.491   0 |
1.491=<Nd<1.492   0 |
1.492=<Nd<1.493   0 |
1.493=<Nd<1.494   0 |
1.494=<Nd<1.495   0 |
1.495=<Nd<1.496   0 |
1.496=<Nd<1.497   1 |*
1.497=<Nd<1.498   3 |***
1.498=<Nd<1.499   3 |***
1.499=<Nd<1.500   2 |**
1.500=<Nd<1.501   0 |
1.501=<Nd<1.502   0 |
1.502=<Nd<1.503   0 |
1.503=<Nd<1.504   0 |
1.504=<Nd<1.505   0 |
1.505=<Nd<1.506   0 |
1.506=<Nd<1.507   0 |
1.507=<Nd<1.508   0 |
1.508=<Nd<1.509   0 |
1.509=<Nd<1.510   1 |*
1.510=<Nd<1.511   4 |****
1.511=<Nd<1.512   4 |****
1.512=<Nd<1.513   2 |**
1.513=<Nd<1.514   0 |
1.514=<Nd<1.515   0 |
1.515=<Nd<1.516   0 |
1.516=<Nd<1.517   0 |
1.517=<Nd<1.518   0 |
1.518=<Nd<1.519   0 |
1.519=<Nd<1.520   0 |
1.520=<Nd<1.521   0 |
1.521=<Nd<1.522   0 |
1.522=<Nd<1.523   0 |
1.523=<Nd<1.524   0 |
1.524=<Nd<1.525   0 |
1.525=<Nd<1.526   0 |
1.526=<Nd<1.527   0 |
1.527=<Nd<1.528   0 |
1.528=<Nd<1.529   0 |
1.529=<Nd<1.530   0 |
---------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

第10図　火山ガラス屈折率データシート（１）

＊＊＊ Grouping Data Sheet ＊＊＊　97/01/24 18:09:16

Series Name : ナガオカキョウシ
Sample Name : 2. イマザトニシグチ　チュウイ
Analist : Yamashita
Material : VG
Immersion Oil : No.38（Nd=1.51907 - 0.000393･t）

（Ascent+Descent）/2

Group. 1
1.4968 1.4973 1.4974 1.4977 1.4978 1.4980 1.4986 1.4987 1.4991 1.4991 1.4992 1.4992 1.4997 1.4997
Group. 2
1.5093 1.5102 1.5108 1.5108 1.5111 1.5114

	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1 :	14	1.4968	1.4997	0.0029	1.4985	0.0009	-0.2364
Group. 2 :	6	1.5093	1.5114	0.0021	1.5106	0.0008	-0.5921
Total :	20	1.4968	1.5114	0.0146	1.5021	0.0058	0.7663

＊＊＊ Histogram ＊＊＊ ＊=1

```
                  0         10        20        30        40        50        60
---------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
1.490=<Nd<1.491   0 |
1.491=<Nd<1.492   0 |
1.492=<Nd<1.493   0 |
1.493=<Nd<1.494   0 |
1.494=<Nd<1.495   0 |
1.495=<Nd<1.496   0 |
1.496=<Nd<1.497   1 |*
1.497=<Nd<1.498   4 |****
1.498=<Nd<1.499   3 |***
1.499=<Nd<1.500   6 |******
1.500=<Nd<1.501   0 |
1.501=<Nd<1.502   0 |
1.502=<Nd<1.503   0 |
1.503=<Nd<1.504   0 |
1.504=<Nd<1.505   0 |
1.505=<Nd<1.506   0 |
1.506=<Nd<1.507   0 |
1.507=<Nd<1.508   0 |
1.508=<Nd<1.509   0 |
1.509=<Nd<1.510   1 |*
1.510=<Nd<1.511   3 |***
1.511=<Nd<1.512   2 |**
1.512=<Nd<1.513   0 |
1.513=<Nd<1.514   0 |
1.514=<Nd<1.515   0 |
1.515=<Nd<1.516   0 |
1.516=<Nd<1.517   0 |
1.517=<Nd<1.518   0 |
1.518=<Nd<1.519   0 |
1.519=<Nd<1.520   0 |
1.520=<Nd<1.521   0 |
1.521=<Nd<1.522   0 |
1.522=<Nd<1.523   0 |
1.523=<Nd<1.524   0 |
1.524=<Nd<1.525   0 |
1.525=<Nd<1.526   0 |
1.526=<Nd<1.527   0 |
1.527=<Nd<1.528   0 |
1.528=<Nd<1.529   0 |
1.529=<Nd<1.530   0 |
---------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

第11図　火山ガラス屈折率データシート（２）

＊＊＊ Grouping Data Sheet ＊＊＊　　97/01/24 18:27:51

Series Name　:　ナガオカキョウシ
Sample Name　:　3. イマザトニシグチ　カイ
Analist　:　Yamashita
Material　:　VG
Immersion Oil　:　No.38（Nd=1.51907 - 0.000393･t）

（Ascent+Descent）/2

Group. 1
1.4965　1.4973　1.4977　1.4978　1.4978　1.4980　1.4980　1.4981　1.4981　1.4982　1.4984　1.4984　1.4984　1.4985
1.4988　1.4988　1.4989　1.4992　1.4994
Group. 2
1.5109

		count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1	:	19	1.4965	1.4994	0.0029	1.4982	0.0007	-0.5169
Group. 2	:	1	1.5109	1.5109	0.0000	1.5109	0.0000	0.0000
Total	:	20	1.4965	1.5109	0.0144	1.4989	0.0029	3.5004

＊＊＊　Histogram　＊＊＊　　＊=1

		0 10 20 30 40 50 60
1.490=＜Nd＜1.491	0	
1.491=＜Nd＜1.492	0	
1.492=＜Nd＜1.493	0	
1.493=＜Nd＜1.494	0	
1.494=＜Nd＜1.495	0	
1.495=＜Nd＜1.496	0	
1.496=＜Nd＜1.497	1	＊
1.497=＜Nd＜1.498	4	＊＊＊＊
1.498=＜Nd＜1.499	12	＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
1.499=＜Nd＜1.500	2	＊＊
1.500=＜Nd＜1.501	0	
1.501=＜Nd＜1.502	0	
1.502=＜Nd＜1.503	0	
1.503=＜Nd＜1.504	0	
1.504=＜Nd＜1.505	0	
1.505=＜Nd＜1.506	0	
1.506=＜Nd＜1.507	0	
1.507=＜Nd＜1.508	0	
1.508=＜Nd＜1.509	0	
1.509=＜Nd＜1.510	0	
1.510=＜Nd＜1.511	1	＊
1.511=＜Nd＜1.512	0	
1.512=＜Nd＜1.513	0	
1.513=＜Nd＜1.514	0	
1.514=＜Nd＜1.515	0	
1.515=＜Nd＜1.516	0	
1.516=＜Nd＜1.517	0	
1.517=＜Nd＜1.518	0	
1.518=＜Nd＜1.519	0	
1.519=＜Nd＜1.520	0	
1.520=＜Nd＜1.521	0	
1.521=＜Nd＜1.522	0	
1.522=＜Nd＜1.523	0	
1.523=＜Nd＜1.524	0	
1.524=＜Nd＜1.525	0	
1.525=＜Nd＜1.526	0	
1.526=＜Nd＜1.527	0	
1.527=＜Nd＜1.528	0	
1.528=＜Nd＜1.529	0	
1.529=＜Nd＜1.530	0	

第12図　火山ガラス屈折率データシート（３）

6　右京第580次調査の出土遺物

右京第580次調査では整理箱にして５箱の遺物が出土した。出土遺物には旧石器時代、古墳時代～江戸時代のものがあるが、量的には鎌倉時代に属するものが大部分でその他の時代の遺物は僅かである。なお、右京第544次調査、右京第650次調査で確認できた弥生時代の遺物は本調査区において認められなかった。

（１）旧石器時代～平安時代の遺物

旧石器時代の遺物（第13図）　第２区の遺構検出面を形成する淡黄褐色粘質土層から出土したサヌカイト製の剥片３点（１～３）がある。いずれの個体も表面、裏面に複数の剥離面が認められるが、明確な打撃点は残存していない。これらの遺物は表面が摩耗し稜線がやや不明瞭になっていることから、流水によって当地に運ばれてきたものと考えられる。

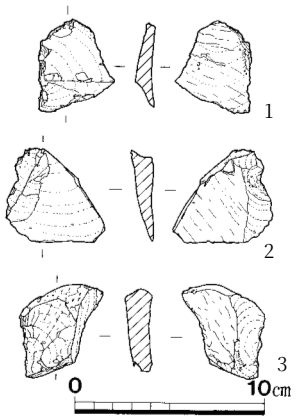
古墳時代～飛鳥時代の遺物（第15図）　古墳時代から飛鳥時代の遺物は鎌倉時代後半期の井戸ＳＥ16、江戸時代以後の溝ＳＤ19から出土した。土師器では甕、高杯、須恵器に杯蓋、杯身、壺、高杯があり、円筒埴輪と考えられる破片も１点出土している。須恵器杯身（53）はＴＫ209型式に相当するもので口径12.7㎝程度を測る。須恵器にはＴＫ10型式、ＴＫ217型式と考えられるものがあるが、いずれも小片のため図示できなかった。

奈良時代～長岡京期の遺物（第15図、図版11（２））　土師器の椀、皿Ａ、高杯、甕、須恵器の杯Ｂ蓋、壺底部があるが、破片数が少なく当該期の遺構から出土したものも僅かである。土師器の椀は口縁部内面に暗文を残す破片であるが、小片のため所属時期を判断することができない。土師器の高杯（52）は長岡京期と考えられるもので、第３区の土坑ＳＫ23から出土した。柱状部の中位から皿部にかけての破片であり、柱状部は七角形に面取りされている。須恵器の壺底部（図版11（２）55）は鎌倉時代の井戸ＳＥ16から出土したもので、底部径が約15㎝程度を測る。この他に土師器皿Ａと須恵器杯Ｂ蓋が井戸ＳＥ16から出土している。

平安時代の遺物　平安時代の遺物と確認できるのは緑釉陶器の小片１点だけである。緑釉陶器片は溝ＳＤ19の上層から出土したもので、硬質の素地に淡緑黄色の釉が施されている。

（２）鎌倉時代の遺物

右京第580次調査で出土した遺物の大部分は当該期に属するものである。とくに、第２区で検出した井戸ＳＥ16から出土した土器群は、時期的なまとまりを想定できる資料で、土師器皿、瓦器椀を中心にした完形品、全形が窺える土師器鉢、瓦器羽釜などを含んでいる。出土状況として特筆すべきことは、倒立状態の瓦器羽釜のなかに重ね置きされた瓦器椀２個体が収まり、さらに瓦器鍋が羽釜の口縁部を塞いでいた点である。第２区の南東隅および第３区の南西隅で検出した溝ＳＤ19では、溝の最下層から完形品を含む瓦器椀や土師器皿などが出土している。



第13図　剥片実測図（1/4）

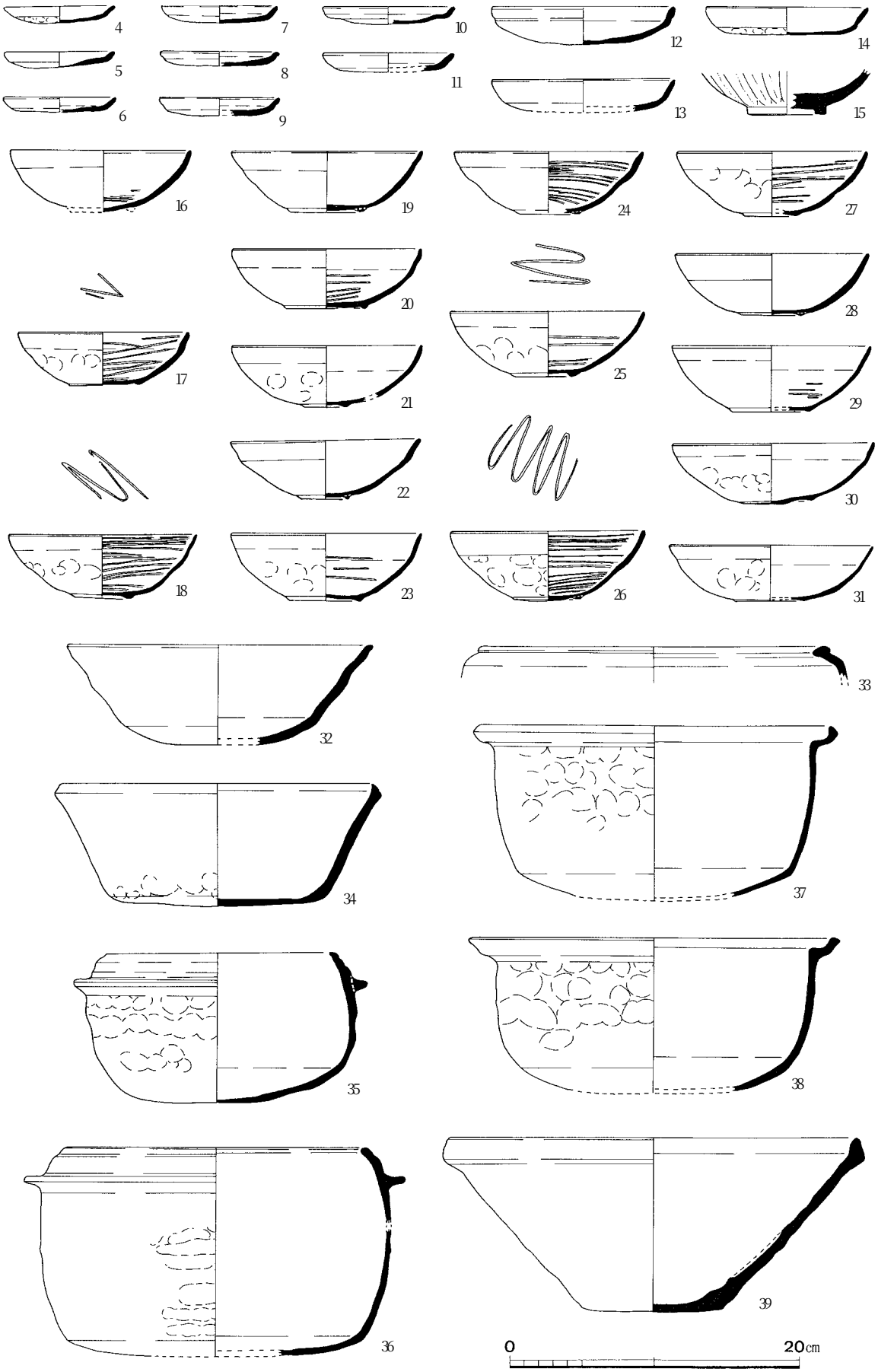
井戸ＳＥ16出土遺物（第14図、図版８～10）　土師器の皿、鉢、鍋、瓦器の椀、皿、鍋、羽釜、三足羽釜、須恵器の鉢、甕、青磁の碗、平瓦などが出土している。これらの遺物は、土師器および瓦器の形態的な特徴から13世紀後半から14世紀前半、鎌倉時代の後半期と考えられる。

土師器皿には口径が7.3～9.1㎝で器高1.2㎝前後のもの（４～10）と、口径11.1～12.6㎝で器高2.2㎝前後のもの（12・13）がある。いずれも、外面は口縁部の上半部にナデを施し、未調整の口縁部下半から底部に指押さえなど成形時の圧痕が認められる。土師器の鉢（32）は口径20.8㎝、器高6.9㎝を測り、その形態は屈曲の不明瞭な底部から口縁部が直線的に伸び、口縁端部付近が丸く納められている。外面は全体に煤が付着していることから煮炊きに使用されていたと考えられる。土師器鍋（33）は口縁端部付近の破片であり、全形を窺うことができない。口縁部は内傾し、端部が玉縁状を呈する。また、土師器鉢（32）と同様に外面には煤が認められた。

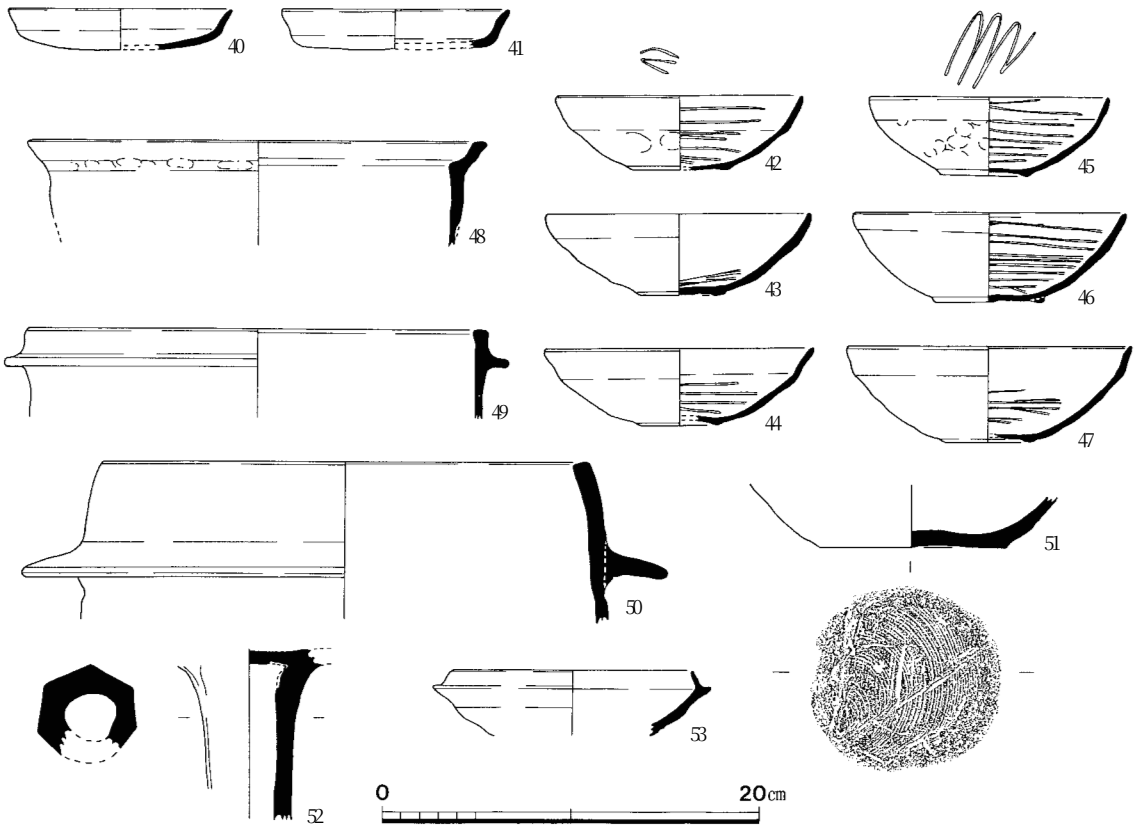
瓦器の皿（11）は口径8.9㎝、器高1.3㎝を測る。形態、調整手法は土師器の小皿に似通っているが、器壁はやや厚手に作られている。瓦器椀（16～31）は口径が11.7～13.8㎝で器高3.6～4.8㎝を測る。いずれも有高台で口縁部外面の上半にヨコナデが施され、17・18・20～24・30では強いヨコナデによって口縁部が直立気味に立ち上がっている。器壁表面の遺存状態が良好な個体（17・18・25・26）では口縁部内面に螺旋状のヘラミガキ、底部内面の見込み部分に鋸歯状の暗文が認められる。瓦器の鍋（34）は完形に復元できる個体で、口径21.3㎝、器高8.5㎝を測る。直線的な口縁部は底部に比べて器壁が厚く、口縁端部はやや内湾気味に先端部を処理することで断面三角形状を呈する。内外面の調整手法にはナデが多用されているが、底部から口縁部への屈曲部付近のみ未調整で成形時の指頭圧痕が認められた。瓦器の羽釜には口径15.7㎝で器高10.3㎝の小型品（35）と口径20.8㎝で器高15㎝程度の大型品（36）が認められた。いずれも幅1.2㎝前後の鍔を有し、鍔から上部の口縁部は大きく内傾する。また、口縁部外面は直線でなく、複数回のヨコナデによって段ないし屈曲している。一方、胴部下半の形態は35が胴部と底部の境界が不明瞭で球形に近いのに対し、36は屈曲が明瞭に形作られており鍋形を呈する。外面は口縁部から鍔部までがヨコナデ調整で、胴部から底部は未調整のため成形時の指頭圧痕を見ることができる。瓦器の鍋（37・38）は口径25㎝前後、器高11㎝前後を測る。受け口状を呈する口縁部の形状は、37が内湾気味であるのに対し、38は外傾する面を形成している。外面調整は煤や吹きこぼれた黒色物の付着によって不明確であるものの、ヨコナデが施されるのは口縁部のみで、胴部から底部にかけては未調整と考えられる。

井戸ＳＥ16からは比較的多くの須恵器と若干の瓦が出土している。しかし、上記の土師器、瓦器にともなうと考えられるのは、須恵器の鉢、甕、平瓦など数点に限られる。須恵器の鉢（39）は口径29.8㎝で器高12㎝を測る。底部から直線的に開いた口縁部は、端部付近で外面が肥厚するとともに内面がやや直立気味に立ち上がり、断面は三角形状を呈している。内外面ともロクロナデによって調整されており、底部外面には糸切り圧痕が認められる。

青磁では碗（15・図版10（２）56）がある。高台から口縁部下半の破片（15）は高台径が5.4㎝を測り、素地の口縁部外面には花弁文様が施されていた。釉は黄緑色を呈する。



第14図　井戸ＳＥ16出土遺物実測図（1/4）



第15図　溝ＳＤ19他出土遺物実測図（1/4）

溝ＳＤ19最下層出土遺物（第15図、図版11）　溝ＳＤ19では上層から江戸時代の陶器片が出土しているが、最下層では井戸ＳＥ16と同様な時期の遺物が出土している。出土遺物には土師器の皿、羽釜、瓦器の椀、鍋、須恵器などがある。土師器の皿（40・41）は口径12cm前後、器高約２cmを測る。土師器の羽釜（49・50・図版11（２）58）は、49が胴部から口縁部にかけて直線的な形態で口径24cm前後であるのに対し、50は口縁部が若干内傾し口径25.5cmを測る。瓦器椀（42～47）は有高台のもので、口径13～15cm、器高3.9～5.1cmを測る。42・45では口縁部内面の螺旋状ヘラミガキとともに見込み部分に鋸歯状の暗文が施されている。瓦器の鍋（48）は受け口状の口縁部を持つもので口径24.2cmを測る。全面にナデ調整が認められるが、頸部付近では部分的に指頭圧痕を留めていた。須恵器には鉢ないし甕の底部（51）がある。底部径が約10cmを測り、底部外面には糸切り圧痕が認められた。

（３）江戸時代以後の遺物

この時期の遺物には土師器皿、陶器、磁器、瓦があるが、いずれも細片で図示できるものはない。遺物は耕作土層、第２区の溝ＳＤ11、第２・３区の溝ＳＤ19上層から出土している。

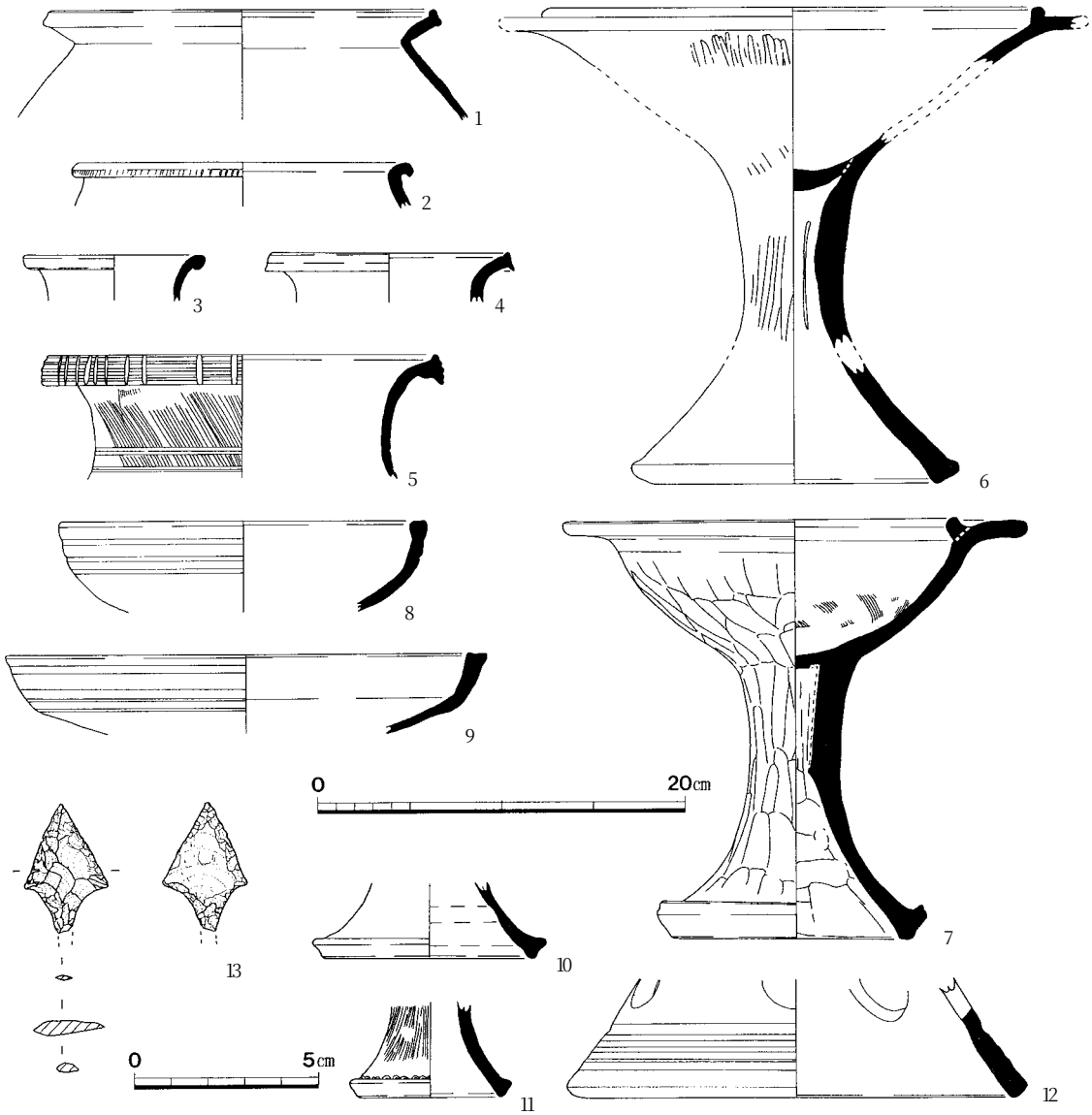
7　右京第650次調査の出土遺物

右京第650次調査では弥生時代～江戸時代の遺物が整理箱にして17箱出土した。出土遺物の量は、第１・２区が最も多く東端の調査区である第５区では僅かであった。また、比較的まとまった資料には弥生時代で第２区の土坑ＳＫ22、長岡京期で第１～４区の溝ＳＤ08、鎌倉時代～室町時代で第１区の土坑ＳＫ05・06がある。

（１）弥生時代の遺物

土坑ＳＫ22出土遺物（第16図・図版12）　第２区の土坑ＳＫ22からは弥生土器の甕（１・２）、壺（３・４）、高杯（６～11）、器台（12）、石器の石鏃（13）が出土した。

甕の１は口径21.2㎝を測るもので、直線的に外傾する口縁部の端部を上方に肥厚させることでやや幅広な外端面が形作られている。調整手法は摩滅の激しい外面は明らかでないが、内面では縦方向のヘラケズリが認められた。２は口径18.5㎝程度に復元できる口縁部の小片である。口縁



第16図　土坑ＳＫ22出土遺物実測図（1/2・1/4）

部全体が巻き込むように外反しており、やや下方に向いた口縁端部にはヘラ状工具によって刻み目が施されている。

壺の３・４は口縁部と考えられるものであるが、凹線文、直線文、刻み目などの文様は認められない。このうち、４は口径13.2㎝で口縁端面を上下に拡張して幅広い外端面が作られている。５は広口壺と考えられるもので、口径21.4㎝で頸部径が約16㎝を測る。器壁の調整には内面から外面の口縁部上半までナデを用い、口縁部下半から頸部にはハケメが認められる。口縁端部は上下に拡張されて幅1.7㎝程度の外端面が作られている。外端面には凹線文が４条施されており、さらに施文単位が明らかでないものの縦位の直線文が重複して施されている。また、頸部から体部にかけては直線文を施すが、部分的な破片のため２条しか確認できなかった。胴部と考えられる破片に直線文、波状文が認められるものがあるが、同一個体と断定することはできなかった。

高杯は杯部の形状によって、水平口縁を有する椀形のもの（６・７）、椀形のもの（８）、屈曲が明瞭な皿形に近いもの（９）に分けることができる。６は口径26㎝、裾部径18㎝を測るもので、水平口縁に垂下端面が付加される形態も想定できる。器壁の摩滅が激しく明確でないが、外面に縦方向のヘラミガキ、杯部内面から水平口縁端部と裾部付近にナデ、脚部内面にはヘラケズリが認められる。７は全形を窺うことができるもので、水平口縁径25.4㎝、口径17㎝、裾部径13㎝で器高は23㎝を測る。裾部の端は上方に折り曲げられ幅広い外端面が形作られている。しかし、この部分には文様が施されていない。脚部内面はヘラケズリで仕上げられ、外面も水平口縁部と裾部端の周辺以外には縦方向のヘラケズリと考えられる痕跡が認められた。８は口径20.1㎝を測り、椀状の口縁部外面には凹線文が３条施されている。９は直線的に外傾する口縁部を持つもので、口縁部外面には８と同様に凹線文が認められる。口径26.4㎝を測る。10・11は高杯の脚部としたが、器台や脚台付土器などの形態も想定できる。裾部径は10が12.8㎝、11で8.9㎝を測る。11の外面端部付近には円形竹管文が施されていた。

器台の12は裾部の径が25.1㎝を測る大型品で、鼓胴形の形態と考えられる。円孔は直径３㎝程度のものが５方向に設けられ、円孔より下には凹線文が４条施されている。乙訓地域では12と同様な鼓胴形の器台は硲遺跡などでも出土している。

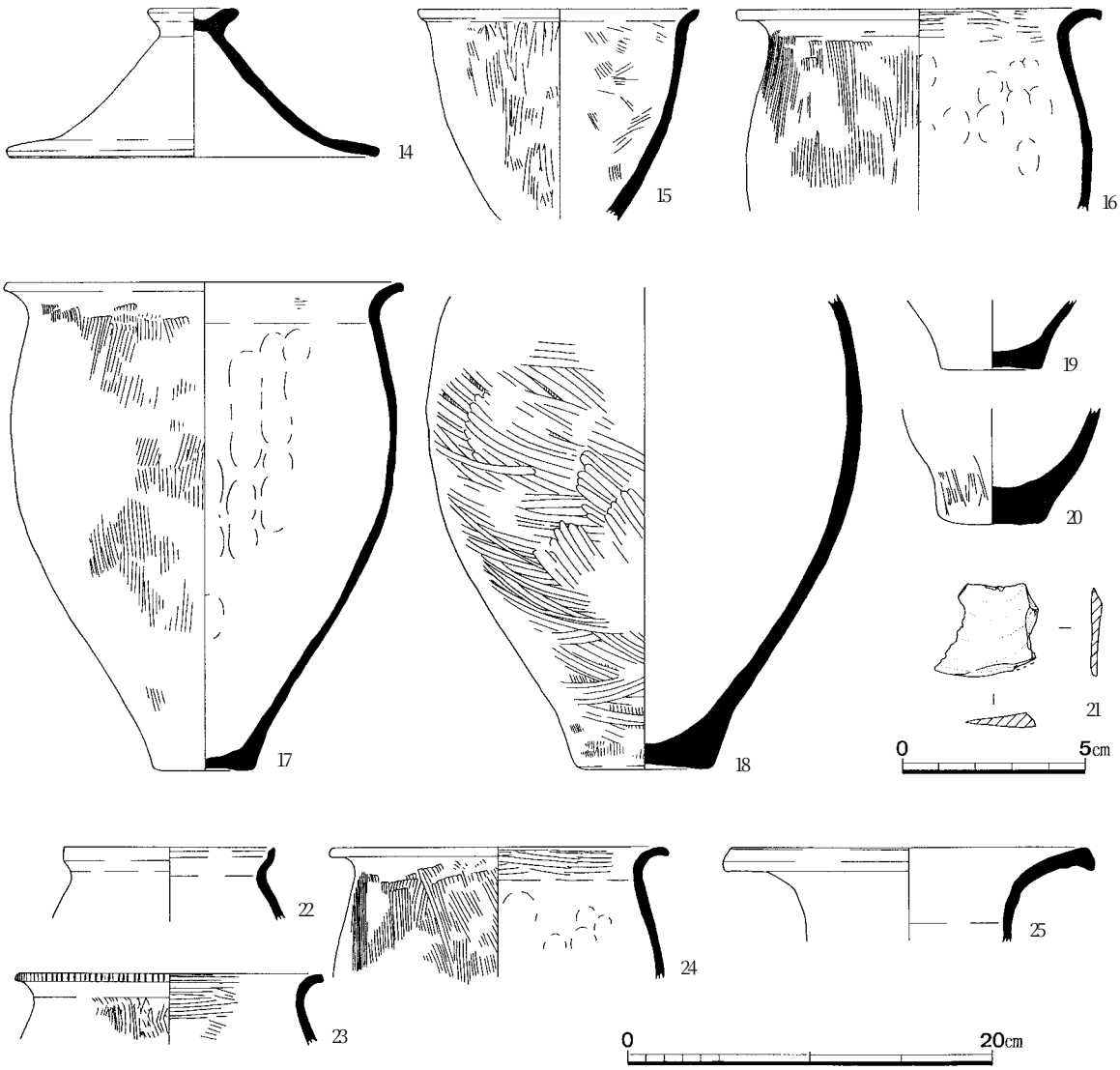
13はサヌカイト製の石鏃である。茎の端部を欠損するが、現状で長さ3.5㎝、鏃身部の長さ2.3㎝で幅2.3㎝を測る。

これら土坑ＳＫ22から出土した土器は概ね弥生時代中期後葉に属するものと考えられる。ただし、水平口縁の高杯（６・７）や大型の器台（12）とともに、より新しい要素を持つ高杯（９）が出土しており、ある程度の時期幅を想定しなければならないだろう。

溝ＳＤ51出土遺物（第17図・図版12）　第３区で検出した溝ＳＤ51からは古墳時代後期の土師器、須恵器などが出土している。しかし、溝ＳＤ51では古墳時代後期の遺物に混じって弥生土器と石器剝片が出土した。また、弥生土器のなかには完形に復元できるものもあるため、弥生時代と考えられる個体を選別して報告する。弥生土器には蓋（14）、甕（15～17）、壺（18）、甕ないし壺の底部（19・20）がある。

14の蓋は比較的大型のもので裾部径20.5㎝で器高8.1㎝を測る。やや外傾する頂部は中央が窪んでおり、直径５㎝の環状を呈している。また、頂部から裾端部への屈曲が強く、裾部は水平気味となる。15～17の甕は外反する口縁部を持つもので、それぞれの直径が15.5㎝、20㎝、22㎝で、完形に復元できた17では器高27.8㎝を測る。甕には口縁端部の刻み目など装飾は一切施されていない。体部の調整は外面がいずれもタテハケを用いるのに対し、内面には15のハケメ調整と16・17のナデ調整が認められる。また、16・17の口縁部内面には横方向のハケメが施されていた。18の壺は腰高で球形気味の体部を持つもので、胴部の最大径が24㎝、底径は7.4㎝を測る。外面調整にはタテハケの後ヘラミガキが施され、内面調整にナデが用いられている。また、底部外面には木の葉圧痕が認められた。19・20は甕ないし壺の底部と考えられる破片で、それぞれ底径が5.4㎝と5.9㎝を測る。21はサヌカイト製の石器剥片である。剥離面は図示した面のみに認められた。

溝ＳＤ51から出土した弥生土器には明確な時期を判断できる材料が乏しい。しかし、蓋や甕の形態から弥生時代中期後半のものと考えられる。



第17図　溝ＳＤ51・土坑ＳＫ49出土遺物実測図（1/2・1/4）

土坑ＳＫ49出土遺物（第17図、図版12）　第３区で検出した土坑ＳＫ49は溝ＳＤ51と同じ古墳時代後期の遺構であり、古墳時代の土師器、須恵器に混じって弥生時代の土器が少量出土している。弥生土器には甕（22～24）と壺（25）がある。

甕には受口状の口縁部を持つもの（22）と大きく外反する口縁を持つもの（23・24）がある。22は受口状口縁の外面が直立した面を形成するもので口径が11.5㎝を測る。形態的には近江地域の影響が窺われるが、口縁部、肩部などに施文が認められない。23は口縁部外端面に刻み目が施されている。外面はタテハケ、内面にはヨコハケが認められた。24は巻き込むように外反する口縁部を有する。体部外面と口縁部の内面に粗いハケメ、体部内面はナデによって調整されている。25は壺口縁部の破片で、頸の長い形態が想定されるものの全形を窺うことはできない。口径20.4㎝を測る口縁部は端部が下方に拡張されて幅広い外端面を有する。

土坑ＳＫ49出土の弥生土器は、甕（23）、壺（25）の形態や近江系甕（22）の存在とその形態より、弥生時代中期後半から弥生時代後期前半の時期が想定できる。

その他の出土遺物（第19図、図版12）　第１区の竪穴住居ＳＨ15、第２区の土坑ＳＫ24～26・溝ＳＤ28からも弥生時代の遺物が出土しているが、いずれも細片であり図示できなかった。ここでは柱穴、耕作土、包含層などから出土した弥生土器、石器をまとめて掲載する。

弥生土器には壺（33・35）、甕（34）、高杯（37）、底部（36）がある。33は壺の口縁部と考えられる破片で口径15.6㎝を測る。第３区の柱穴Ｐ157から出土した。34は第２区の包含層（第16層）から出土した。やや肥厚させた口縁端部には凹線文を２条施し、頸部に貼り付けられた幅１㎝程度の突帯にはハケ状工具による刻み目を施す。35の壺は第２区の柱穴Ｐ69から出土した。口縁端部は垂下気味に作られ、外端面に凹線文を３条施している。36は甕ないし壺の底部と考えられる破片で、第２区の柱穴Ｐ102から出土した。37の高杯脚部は第２区の包含層（第17層）から出土した。裾部径12.5㎝で内面調整にはヘラケズリが用いられている。34・35・37は形態や施文の特徴から弥生時代中期後半のものと考えられる。

石器には鉄剣形石剣（40）、石鏃（42）、石庖丁（43）、不明品（41）がある。40の鉄剣形石剣は粘板岩製であり、刃部の先端や基部などを欠損するもののほぼ全形を残している。長さ11.4㎝程度で刃部の最大幅が2.5㎝、厚さ0.7㎝を測り、側面を面取りした基部は幅２㎝前後を測る。石剣は第２区の柱穴Ｐ62から出土した。41の不明品は粘板岩製の磨製石器で、第１区の溝ＳＤ08から出土している。42は第３区の溝ＳＤ34から出土したサヌカイト製の平基式石鏃である。43は破損が激しく全形を窺うことができないが、穿孔の位置などから石庖丁とした。43は第１区の耕作土中より出土したものである。

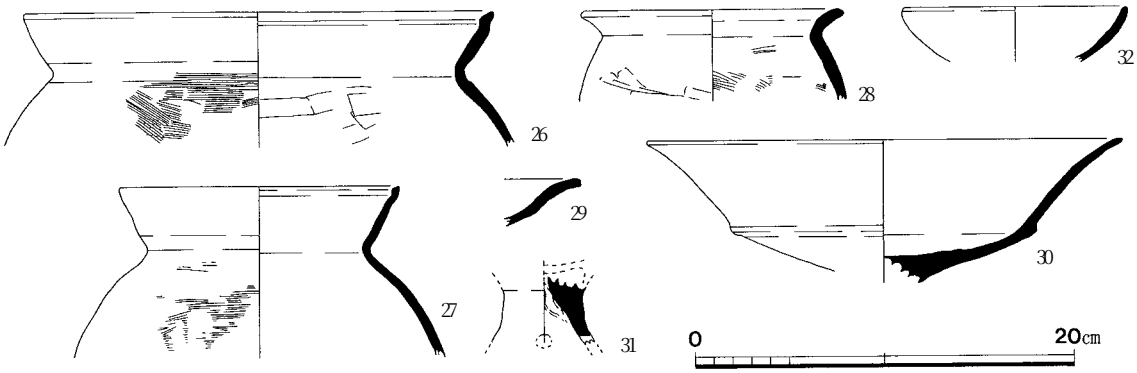
（２）古墳時代から奈良時代の遺物

竪穴住居ＳＨ14・土坑ＳＫ23・56出土遺物（第18図、図版12）　第１区の竪穴住居ＳＨ14では甕（28）、壺（29）、高杯（31）が、第２区の土坑ＳＫ23で甕（26）、高杯（32）、第４区の土坑ＳＫ56からは甕（27）、高杯（30）が出土している。

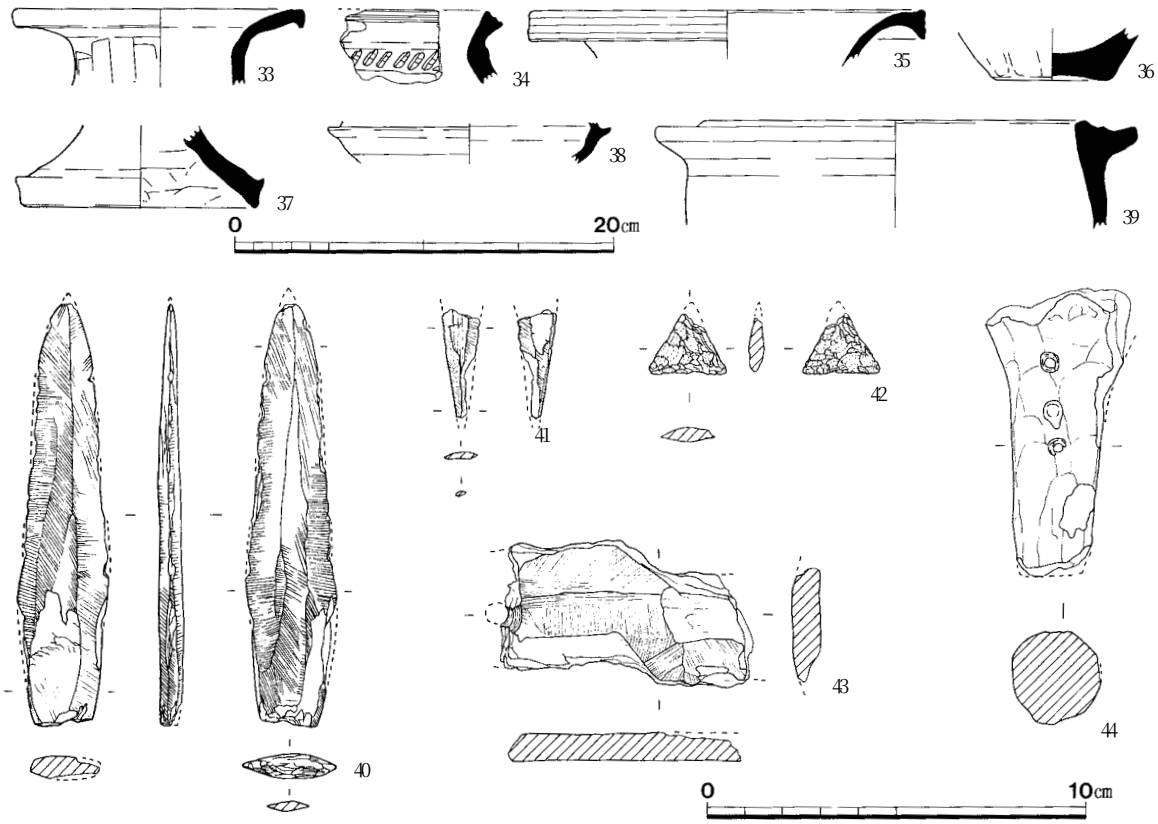
26・27の甕は端部内面を肥厚させるもので、肩部の調整には外面にヨコハケ、内面にヘラケズ

リが施される。口縁部の形態は26が内湾気味に立ち上がるのに対し、27は直線的で立ち上がりが高い。また、27は内面のヘラケズリが口縁部と体部の屈曲部付近まで及んでいた。口縁部の径は26が25㎝で27が15㎝を測る。28の甕は外反する口縁部の端部が丸く納められるもので、体部外面に板状工具による調整、内面にハケメを行う。29は小型の二重口縁壺と考えられるが小片であり断定できない。30の高杯は杯底部と口縁部の境界に明瞭な屈曲と突出を有する高杯で、屈曲部より上の口縁部は大きく外反して立ち上がる。大型の高杯であり口径25.2㎝、口縁部の高さ4.5㎝を測る。31・32は小型の高杯と考えられるが小片である。

これらの遺物は古墳時代前期末から中期前半にかけてのもので、なかでも土坑ＳＫ56出土遺物は甕や高杯の形態にやや古い要素を見出すことができる。



第18図　竪穴住居ＳＨ14・土坑ＳＫ23・56出土遺物実測図（1/4）



第19図　出土遺物実測図（1/2・1/4）

その他の出土遺物（第19図、図版13（２））　第２区の包含層（第16層）から出土した須恵器杯身（38）は口径12㎝程度に復元され、ＴＫ43型式ないしＴＫ209型式に属するものと考えられる。土馬の脚（44）は第３区の包含層（第14層）から出土した。脚中位の直径が2.5㎝程度で、外側面の中央には円形竹管文を縦位に配置している。

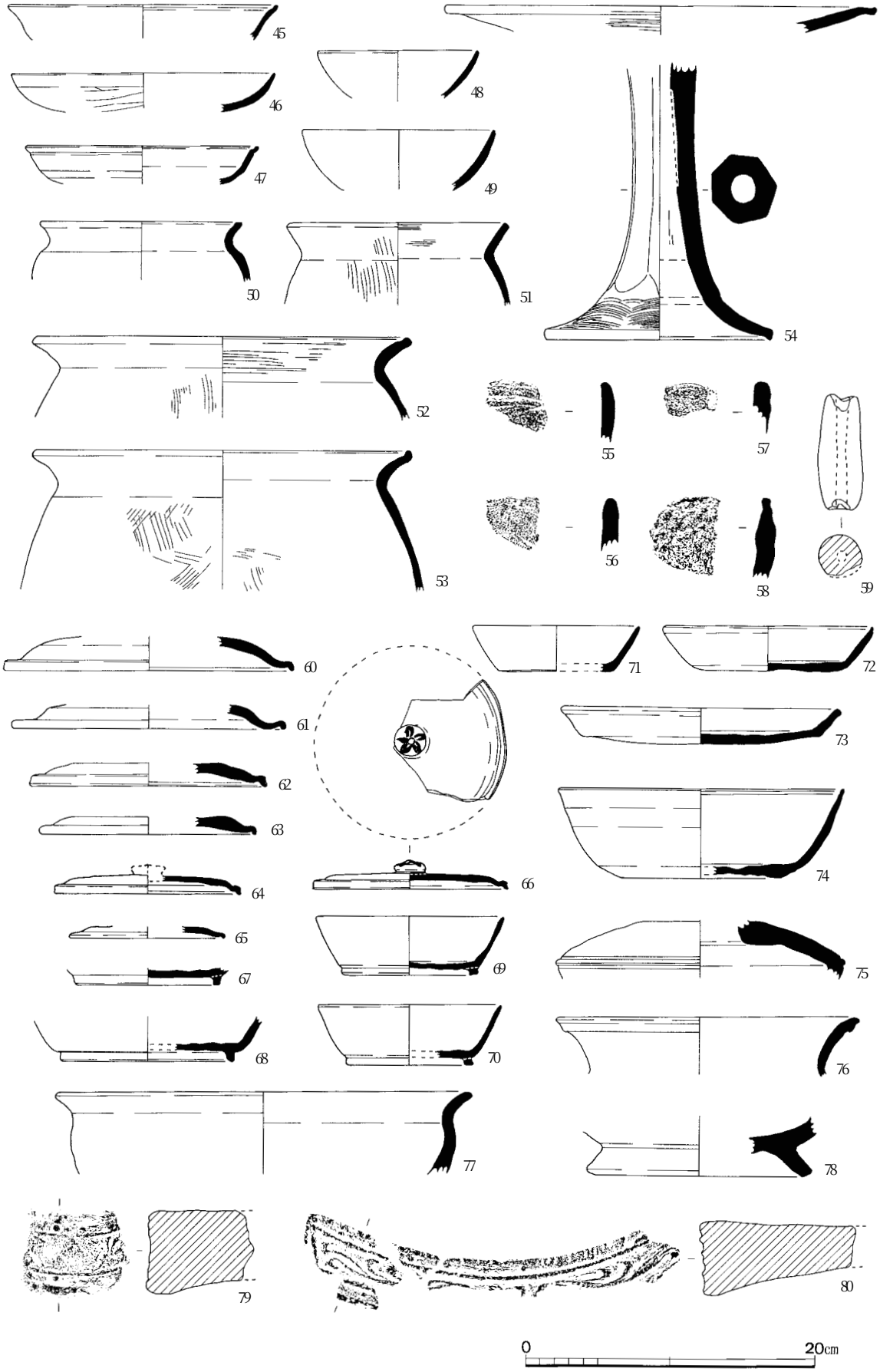
（３）長岡京期の遺物（第20図、図版13・14）

この時期の遺構には四条条間北小路北側溝ＳＤ08と柵４条がある。しかし、柵を構成する柱穴の出土遺物が僅かであるため、第１～４区で検出した北側溝ＳＤ08の出土遺物に関してのみ報告する。出土遺物には土師器（45～53）、須恵器（60～78・133・134）、緑釉陶器、製塩土器（55～58）、土錘（59）、軒平瓦（79・80）がある。

土師器には杯Ａ、杯Ｂ蓋、皿Ａ（45～47）、椀Ａ（48・49）、高杯（54）、甕（50～53）がある。皿Ａは口径16.1㎝の皿ＡⅠ（47）と口径18.5㎝前後の皿ＡⅡ（45・46）で、いずれも外面調整には口縁部にヨコナデ、底部にヘラケズリを用いるｂ手法が認められる。ただ、46が口縁部の下半までヘラケズリが及んでいるのに対して、45・47では底部のみにヘラケズリが認められた。また、口縁端部の形態も45・47は外上方にややつまみ出されていた。48・49の椀Ａは外面全体にヘラケズリを行うｃ手法が認められる。口径は48が11.1㎝、49が13.4㎝を測る。54の高杯は口径約30㎝で器高23㎝程度に復元できる。杯部と脚裾部の外面にヘラミガキが施され、棒心作りの柱状部は七角形に面取りされている。甕には口径15㎝前後の小型品（50・51）と口径約26㎝の大型品が認められる。口縁部の形態には直線的なもの（51）と外反するもの（50・52・53）があり、後者では口縁端部がややつまみ上げられていた。杯Ａ、杯Ｂ蓋には図示できるものはなく、また、土師器では墨書土器が認められなかった。

須恵器には杯Ａ（71・72）、杯Ｂ（67～70・134）、杯Ｂ蓋（60～66・133）、杯Ｅ（74）、皿Ａ（73）、壺（75・78）、甕（76）、鉢（77）がある。杯Ａは口径11.6㎝の杯ＡⅡ（71）と口径14.6㎝の杯ＡⅢ（72）で、いずれも器高は3.1㎝を測る。72は口縁部の形態が内湾気味であり、端部外面にはロクロナデによって内傾する外端面が形作られている。杯Ｂには口径13㎝前後のもの（67・69・70・134）と口径16㎝前後に復元できるもの（68）がある。60～66・133の杯Ｂ蓋は口径10.6～20㎝を測る。66は唯一全形を復元できるもので口径13.4㎝で器高２㎝を測る。宝珠つまみの上面には５弁の花模様が墨で描かれていた。74の杯Ｅは金属製の椀を模したもので口径19.8㎝、器高6.2㎝を測る。底部外面はロクロ回転を利用したヘラケズリで薄く作られており、口縁端部内面には不明瞭な沈線が１条巡っている。73の皿Ａは完形に近い個体で口径19.4㎝、器高2.5㎝を測る。直線的に外傾する口縁部は端部を外面にやや肥厚させて丸く収める。壺では壺Ｋ（75）と底部（78）が出土した。75は肩部から体部への屈曲部の上下に沈線を各１条巡らせている。76は甕の口縁部で口径20㎝を測る。77は鉢Ｂと考えられるもので口径28㎝前後に復元できる。須恵器では66のほかにも墨痕を残す破片が２点あった。

緑釉陶器は第３区で厚手の体部片が１点出土したが、小片のため器形は判然としない。素地は軟陶で淡緑黄色に発色する釉が部分的に残る。



第20図　溝ＳＤ08出土遺物実測図（1/4）

製塩土器（55～58）は口縁部を残すものを図示したが、おおよその直径を復元できるものはない。内外面には器壁の摩滅が著しいものを除き指頭圧痕が認められたが、布目圧痕を残すものは認められなかった。

土錘（59）は土師質のもので、長さ８㎝で最大径３㎝を測る。長軸には直径１㎝未満の孔が貫通しており、上下の孔口は部分的に抉れている。

軒平瓦（79）は部分的な破片で瓦当面の摩滅が激しく型式を判別するに至らなかった。軒平瓦（80）は溝ＳＤ08埋土の最上層から出土した。主葉は中心飾りから波状に連続して延びるもので、主葉から派生する子葉は上方に３葉、下方に１葉が想定できる。上下の外区には珠文を配するが狭い脇区には配置されない。凹面に布目圧痕と斜め方向のヘラケズリ、凸面には縦方向のヘラケズリが認められる。瓦当面の文様構成は乙訓寺出土瓦に類例があり、乙訓寺出土瓦の分類ではＯＨ―10型式として平安時代中期以降の年代観が与えられている。[10]

溝ＳＤ08出土遺物のなかで図示したものは、45・48・49・51～57・63・65・66・70・72・74・80が第１区、47・50・61・64・71・73・78・79が第２区、46・58・60・62・67～69・75～77が第３区、59が第４区より出土した。

（４）平安時代の遺物（第19・22図、図版15）

右京第650次調査では明確な平安時代の遺構を検出することができなかったが、溝ＳＤ34や柱穴、耕作土から僅かながらも遺物が出土している。

39は第３区の柱穴Ｐ172から出土した土師器の羽釜であり、口縁部の直下に鍔が付加され鍔から下の体部は直線的に作られる。口径約20㎝で鍔の幅は２㎝前後を測る。39と同様な土師器羽釜は右京第12次調査で出土している。第３区の溝ＳＤ34からは緑釉陶器（128）と土師器の甕（129）が出土した。128は緑釉陶器の椀と考えられるもので灰褐色の素地に暗緑色の釉が塗布されている。129の土師器甕は39と同様な体部形態が想定できるもので口径約20㎝を測る。直線的に外傾する口縁部は厚手に作られており、端部には幅１㎝程度の外端面を有する。口縁部調整にはナデが主体に用いられ、ハケメは口縁部内面の下半と体部外面に施される。135は第２区の耕作土に含まれていた灰釉陶器で高台の直径が9.5㎝を測る。

（５）鎌倉時代～室町時代の遺物

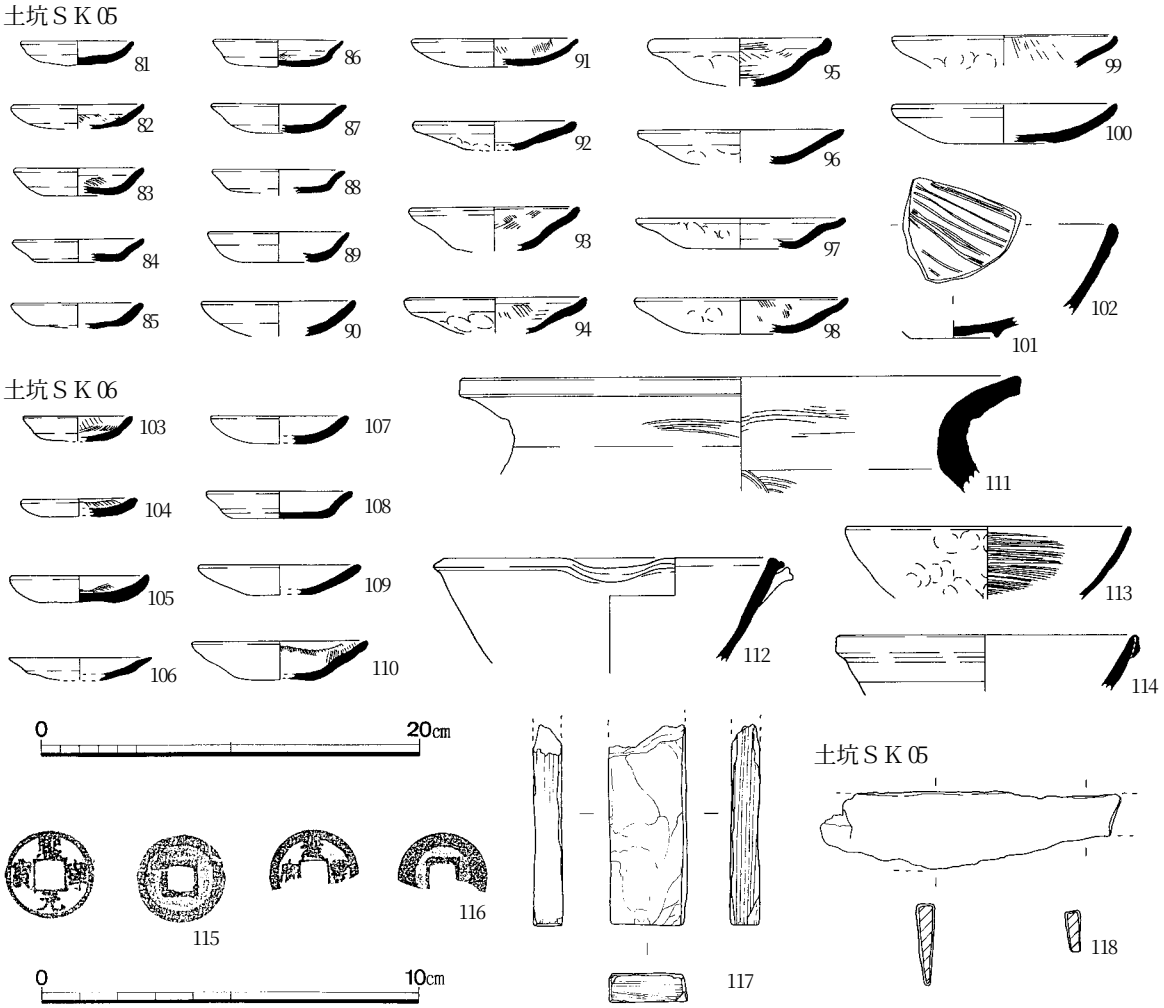
土坑ＳＫ05出土遺物（第21図、図版15）　第１区の土坑ＳＫ05では土師器の小皿を中心に大量の遺物が出土した。出土遺物には土師器の小皿（81～100）、瓦器の椀（101）、白磁の碗（102）、鉄製品に刀子（118）がある。

土師器の小皿は図示したもの以外にも多数の個体が出土している。しかし、それらは形態や法量などによって下記の数種類に分けることができた。81～91・100は比較的短い口縁部を有するもので口径と底径の差が少ない。この一群は口径が６～９㎝の小型品（81～91）と口径が12㎝の大型品（100）に大別される。また、小型品では口縁部と底部の屈曲が不明瞭なもの（90）や短く直線的に立ち上がるもの（85）、外反気味に立ち上がるもの（86）が見られる。一方、92～99は長い口縁部に不明瞭な段を有するものである。口径8.6～12㎝までのものがあるが、その分布

には有意な群を認めることができない。81～100の内外面調整はナデが主体的に用いられており、調整手法には明確な違いを見出すことができなかった。しかし、92～99の長い口縁部を有する一群では口縁部下半が未調整で成形時の指頭圧痕を残しており、また比較的多くの個体で内面にハケ状の圧痕が認められた。

101の瓦器椀は底部の破片で見込み部分に鋸歯状の暗文が施される。瓦器椀は個体数が非常に少なく、101のほかに口縁部の破片が数点見られるだけであった。102の白磁碗は口縁端部が外側にやや肥厚して玉縁状を呈する。白磁では102の１点だけが出土した。118は鉄製の刀子片で刃部の中程から先端、茎部の大部分を欠損している。刃部の幅は２㎝程度と考えられ厚さ0.5㎝を測り、茎部の幅は１㎝前後と考えられる。

土坑ＳＫ06出土遺物（第21図、図版15）　第１区の土坑ＳＫ06からは土師器の小皿（103～110）、須恵器の甕（111）、鉢（112）、瓦器の椀（113）、白磁の碗（114）、銭貨（115・116）、砥石（117）が出土した。土坑ＳＫ06の出土遺物は土坑ＳＫ05と同様に土師器の小皿の個体数が多い。また、須恵器、瓦器、白磁の出土量は土師器に比べて僅かで、とくに白磁は114以外には出土していない。このような土坑ＳＫ05・06に見られる土師器小皿の優位性は土坑の性格の一端を



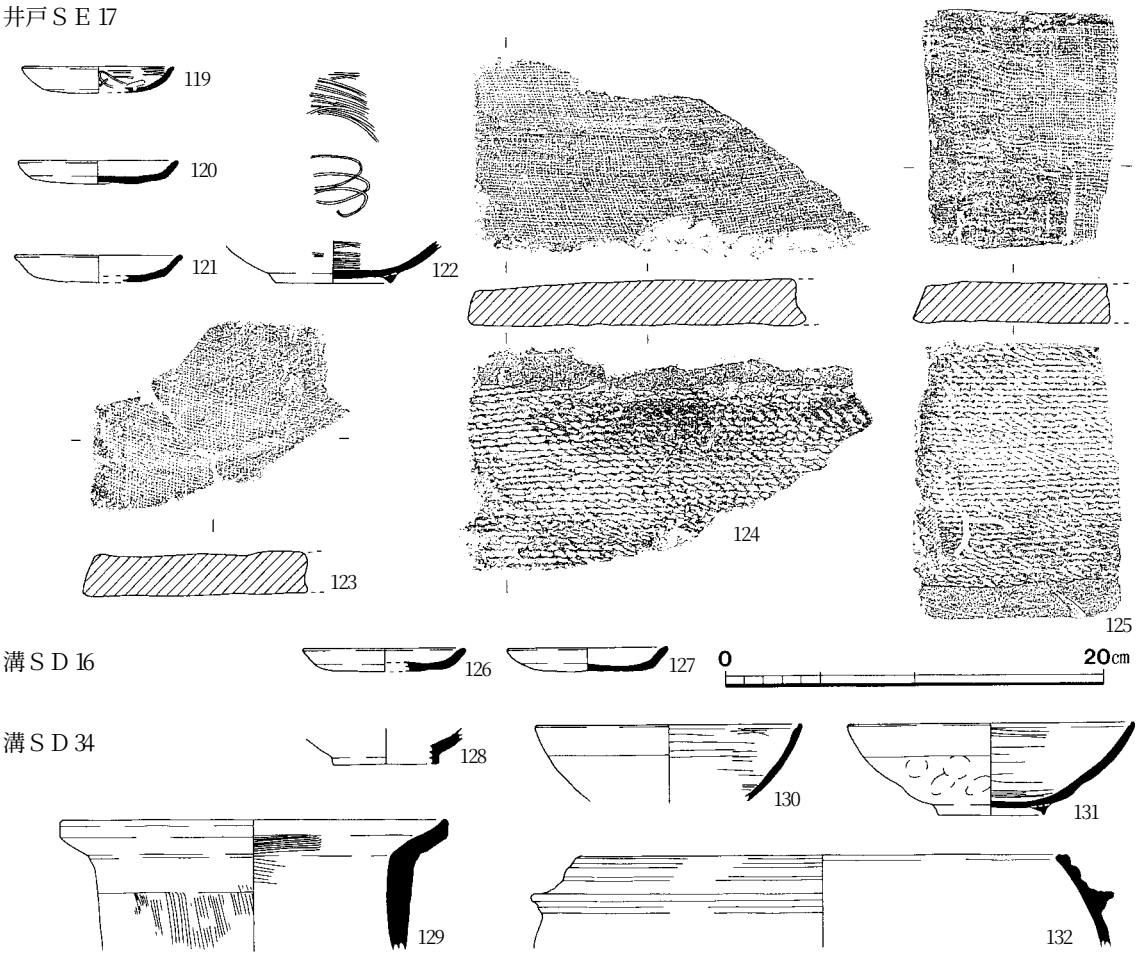
第21図　土坑ＳＫ05・06出土遺物実測図（1/2・1/4）

示すものと考えられる。

土師器小皿には口径10㎝を超える大型品が目立たず、比較的短い口縁部で小型品のもの（103～108）と長い口縁部を有するもの（109・110）が主体を占める。111の須恵器甕は口径29.8㎝の大型品である。長岡京期の四条条間北小路北側溝ＳＤ08からの混入など平安時代以前のものとも考えられる。112の須恵器鉢は口縁部に注ぎ口を設けた片口鉢である。口径18.6㎝で注ぎ口の幅は約４㎝を測る。113の瓦器椀は口径15㎝程度に復元できるもので、口縁部の内面には螺旋状のヘラミガキが密に施されている。114の白磁碗は口縁端部が外側に肥厚して玉縁状を呈する。銭貨には115の熙寧元寶（初鋳1068年）と116の元豊通寶（初鋳1078年）があり、いずれも北宋銭であった。117の砥石は黄色系を呈する粘板岩製である。幅２㎝前後、厚さ0.8㎝までで、表裏面に使用痕が認められる。

井戸ＳＥ17出土遺物（第22図）　井戸ＳＥ17は第２区で確認した。井戸の北東部には後述の溝ＳＤ16が接続しており、両者は一連のもので同時期に存在したと考えられる。井戸ＳＥ17の下層からは土師器の皿（120・121）、瓦器の椀（122）、皿（119）が出土し、上層には平瓦（123～125）、丸瓦などが含まれていた。

120・121の土師器小皿は口径約９㎝で器高1.3㎝前後を測る。形態は屈曲の不明瞭な底部との



第22図　井戸ＳＥ17・溝ＳＤ16・34出土遺物実測図（1/4）

境界から短い口縁部が立ち上がるもので、壁面調整は口縁部外面から内面にナデ、底部外面は未調整で成形段階の指頭圧痕を残す。122は瓦器椀の底部片で高台径が6㎝を測る。口縁部内面にはヘラミガキが行われ、底部内面の見込み部分には螺旋状の暗文を施す。119の瓦器小皿は土師器小皿（120・121）と同様な形態を有するもので口径8.2㎝を測る。口縁部内面には不明瞭ながらもヘラミガキを認めることができる。平瓦（123～125）、丸瓦は井戸廃棄時の埋土に含まれていたもので119～122の土器群とは時期的な相違が認められる。平瓦は縄叩き、布目圧痕を有する厚手のもので、平安時代以前の遺構から混入したものとも考えられる。

溝ＳＤ16出土遺物（第22図）　第２区の溝ＳＤ16では土師器小皿（126・127）、瓦器椀が出土した。いずれも口径8.7㎝程度、器高1.2㎝前後で、形態、法量、調整手法は井戸ＳＥ17出土のものと変わらない。

溝ＳＤ34出土遺物（第22図）　第３区の溝ＳＤ34出土遺物には土師器小皿、瓦器の椀（130・131）、羽釜（132）が認められる。130・131の瓦器椀は口径14～15㎝で器高約５㎝を測る。口縁部外面の下半は未調整で成形段階の指頭圧痕を残し、内面には粗い螺旋状のヘラミガキが施される。132の瓦器羽釜は内傾する口縁部の外面がヨコナデによって段状を呈している。幅約１㎝の鍔はその突出が比較的不明瞭で、鍔部に施されたナデ調整は粗雑であり部分的に指頭圧痕を残す。また、鍔より下の体部は未調整と考えられる。

（６）江戸時代以後の遺物

この時期の遺物は土師器、陶磁器、瓦が溝ＳＤ01、耕作土、床土などから出土している。しかし、いずれも細片で図示できるものはない。土師器には小皿、陶器では信楽系の甕や備前系の甕が見られる。磁器は染付の碗や皿が中心を占める。（中島　皆夫）

8　ま　と　め

（1）旧石器時代

旧石器時代の遺物には右京第544次調査のサヌカイト製の石器と剝片、右京第580次調査のサヌカイト製剝片があった。右京第544次調査の2点ある石器は、横長剝片を用いたもの（87）と、縦長剝片を用いたもの（88）との違いはあるが、両者に刃潰しの細部調整があり、同機能をもつ石器群と考えられる。また両者とも典型的な瀬戸内技法とはいえないが、断面台形である点や、背面調整の手法など、形態と調整手法に類似するものがあることから、国府型ナイフ形石器期段階と考えられる。

今里遺跡の旧石器時代遺物は、当調査開始前までにナイフ形石器7点・翼状剝片5点・縦長剝片3点・不定形剝片3点が知られていた。その分布を見ると、井ノ内から細長く南東方向に勝竜寺までのびる低位段丘[11]を挟んで、西側散布域[12]と東側散布域[13]に分かれる。西側散布域は、低位段丘を覆う緩扇状地に立地し、東側散布域は低位段丘裾の氾濫原Ⅰに立地する。今回出土した石器類は西側散布域に含まれ、これまでにナイフ形石器4点と縦長剝片1点・他剝片3点が出土している。

乙訓地域の旧石器散布地は、約20遺跡あるが、そのほとんどが後世の再堆積層出土であった。しかし今回の調査で、旧石器単純層が確認できた成果は大きいといえる。出土層は砂礫堆積層で、流路堆積または緩扇状堆積と考えられる。この堆積の直上シルト堆積の3層位を分析した結果、わずかな検出量ではあるが、上位にアカホヤ火山灰（約6000年前）が多く、下位に姶良丹沢火山灰（約21000～22000年前）が多いことがわかった。乙訓地域で初めて、ナイフ形石器出土層と火山灰含有層との層位関係を明らかにすることができた。その後1997年に実施された南栗ケ塚遺跡（長岡京跡右京第570次調査[14]）で旧石器単純出土層が検出され、国府型ナイフ形石器および剝片接合資料出土層から姶良火山灰が検出されている。この2例の調査成果により、乙訓地域の旧石器研究の足がかりがつかめて行くことに期待したい。

（2）古墳時代

古墳時代の遺物で注目されるのは、右京第544次調査溝ＳＤ34出土の須恵器把手付椀である。京都府下の類例資料[15]は8例あり、そのうち4例が乙訓地域出土で、いずれも集落遺跡からの出土である。当今里遺跡からは過去に1例が報告されている。今回の出土も、今里集落遺跡関連遺物と考えられる。また、当出土例は、器体が短頸壺形であり、体部を3条の沈線で4帯に区画し、その中央に配した沈線の上・下の区画帯に波状文を巡らせている。また把手は体部最大径位置より下方に付けられている。今までに出土しているものは、体部が椀形もしくは鉢形で、波状文などを1帯巡らすか、または無文であり、文様構成と形態に差が見られる。文様構成や形態に類例を求めれば、大阪府布尾遺跡出土例[16]が近いと思われる。ただ、当調査出土例は、体部下半から底部にかけてのヘラケズリがロクロケズリであることや、平底からの体部の立ち上がりが鋭く境が明瞭である点などは、後出的要素といえる。朝鮮半島の陶質土器・瓮を課題に取り組んでいる小

池寛氏の分類では、慶州味鄒王陵１―Ｇ出土例にみられる「Ｂ２」類[17]に近い。

布留式段階の土師器類は新しい様相を示すものが多く、須恵器出現以後と考えられる。特に溝ＳＤ34出土土器群は、85の把手付椀出土堆積層より下層から出土したものが多く、層位的には前後関係が認められるが、時期的には連続しているものと理解している。長岡京市内の資料では、長岡京跡左京第17次調査溝ＳＤ1702出土一括遺物[18]段階か、やや後出と考えられる。

この他、溝ＳＤ34出土土師器群にともなって土製品が出土したことも、特記すべきことである。形態は明らかでないが、祭祀用の器物模造土製品であろうか。類例を知らない。検出した溝がほぼ南北方向に直線的であることと関係するのかも知れない。周辺地の調査により、この溝を追究する機会があれば、再考することにしたい。（岩崎　誠）

（３）長岡京期

長岡京期では右京第650次調査において右京第83次調査のＦトレンチに続いて四条条間北小路北側溝を確認したことが最も大きな成果である。右京第650次調査の四条条間北小路北側溝ＳＤ08からは土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、土錘、軒平瓦など多数の遺物が出土している。出土遺物群は概ね長岡京期に収まるものであるが、なかには須恵器杯Ａ（72）、杯Ｅ（74）、壺（75）、軒平瓦（80）など所属時期や生産地などに検討を要するものが含まれている。

所属時期の検討を要するものには須恵器杯Ｅ（74）、壺Ｋ（75）、軒平瓦（80）などがある。須恵器杯Ｅ（74）は口径が20㎝に近い大型品であり、長岡京域出土の類例[19]に比べて腰高な形態を呈している。肩部と体部に各１条の沈線を巡らす須恵器壺Ｋ（75）とともに奈良時代後期のものと考えるべきだろう。今里西ノ口地区から東側の低位段丘Ｉ縁辺部にかけては、乙訓寺をはじめ奈良時代の遺構が集中する地域[20]でもある。須恵器杯Ａ（72）は口縁部の形態が内湾気味で端部外面に内傾する面を有している。このような口縁部形態は長岡京期の須恵器の小型食器類にあって特異なものであり類例がない。他地域の出土例を中心に検討を要する資料と考えられる。溝埋土の最上層から出土した軒平瓦（80）は乙訓寺出土瓦のＯＨ―10型式に相当し、平安時代中期以降の年代観が与えられている。この資料は部分的に欠損しているが、これまで明らかでなかった同型式の文様構成をほぼ窺うことができた。外縁が明確に認められ外区の珠文が均等に配置されている点や、直線顎でなく顎部に端面が削り出されている点が乙訓寺出土資料と異なる。

（４）鎌倉時代から室町時代

右京第580次調査の井戸ＳＥ16、溝ＳＤ19最下層、右京第650次調査の土坑ＳＫ05・06、井戸ＳＥ17、溝ＳＤ16・34などがこの時期の遺構で、とくに右京第580次調査の井戸ＳＥ16、右京第650次調査の土坑ＳＫ05・06からまとまった量の遺物が出土している。

土師器小皿の法量や口縁部形態などから出土遺物群を検討すれば、井戸ＳＥ16、溝ＳＤ19最下層、井戸ＳＥ17、溝ＳＤ16・34と土坑ＳＫ05・06の２つのまとまりを見出すことができる。井戸ＳＥ16に代表される遺物群は口径８㎝前後の土師器小皿が主体を占めるのに対し、土坑ＳＫ05・06の土師器小皿は器高に対する口径の縮小が著しく後出する要素と考えられる。また、土坑ＳＫ05・06の土師器小皿に長い口縁部に不明瞭な段を有するものが含まれる点も両者の時期差を示す

ものであろう。井戸ＳＥ16出土土器群の時期は土師器小皿の特徴に加え、粗いヘラミガキを口縁部内面にのみに施す瓦器椀や口縁部が内傾する瓦器羽釜の形態などから鎌倉時代後半期のものと考えられる。一方、土坑ＳＫ05・06の出土遺物群は伴出した瓦器椀が紛れ込み資料である可能性を持つことから、鎌倉時代末期から室町時代中頃までの時期幅を持たせたい。なお、井戸ＳＥ16出土遺物群より後出する要素を持つものに祭ノ神遺跡第３次調査の土坑ＳＫ15出土資料[21]がある。この資料では井戸ＳＥ16出土遺物群に比べて瓦器椀の小型化と偏平化、瓦器羽釜の口縁部直立化などが認められる。また、瓦器椀に無高台で器壁が著しく薄いものを含むことも大きな特徴として示すことができる。　（中島　皆夫）

注１）山口　博他「長岡京跡右京第83・105次調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
２）木村泰彦「右京第403次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
３）原　秀樹「右京第412次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
４）岩崎　誠「右京第417次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
５）山本輝雄「右京第500次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
６）中尾秀正「右京第５次調査概要」『長岡京市報告書』第12冊　1984年
７）小田桐　淳「長岡京跡右京第311次調査概要」『長岡京市報告書』第22冊　1989年
８）岩崎　誠「右京第617次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年
９）原　秀樹「右京第356次調査略報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
10）中尾秀正「乙訓寺の瓦」『長岡京古瓦聚成』『向日市報告書』第20集　1987年
11）日下雅義・植村善博「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一付図２　1991年
以下立地に関する表現は地形分類図の表記による。
12）長岡京跡右京第346・403・412・417次調査
岩崎　誠「右京第346次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
13）長岡京跡右京第７・12・186・195・362・505次調査
吉岡博之・高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報』1979　1979年
岩崎　誠「右京第186次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
岩崎　誠「右京第195次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1986年
岩崎　誠「右京第362次調査略報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
岩崎　誠「右京第505次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
14）原　秀樹「右京第570次調査概報」『長岡京市センター年報』平成９年度　1999年

15）山中　章「京都府下の須恵器小型把手付椀の分布」『京都考古』第59号　京都考古刊行会　1991年
この中で短文明快に小型把手付椀の出土意義を示している。
平　泰久「乙訓の初期須恵器」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念論集　1984年
山田邦和「近畿地方北部の古式須恵器―奈具岡遺跡出土須恵器の検討を通じて―」『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』古代学協会　1985年
16）岡戸哲紀「第Ⅲ章第３節　遺構と遺物」『陶邑・伏尾遺跡Ａ地区』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1990年（53頁　第41図　1759―00出土遺物　64）
17）小池　寛「須恵器・椀に関する基礎研究―生産地を中心にして―」『京都府埋蔵文化財論集』第３集―創立十五周年記念誌―　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996年
18）岩崎　誠「左京第17次調査概要」『長岡京市報告書』第５冊　1980年
19）木村泰彦「長岡京期」『長岡京市史』資料編一　1991年
20）中尾秀正他「飛鳥・奈良時代」『長岡京市史』資料編一　1991年
21）中島皆夫「祭ノ神遺跡第３次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年

付表―５　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１９集
編著者名	岩崎　誠、中島　皆夫
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（右京第524次）今里遺跡	長岡京市今里五丁目315-4、西ノ口15-2他	26209	107 32	34°55'54"	135°41'22"	19961001～19961219	474㎡	道路新設工事
長岡京跡（右京第580次）今里遺跡	長岡京市今里五丁目310-2他	26209	107 32	34°55'54"	135°41'23"	19970924～19971219	315㎡	道路新設工事
長岡京跡（右京第650次）今里遺跡	長岡京市今里五丁目327-2他	26209	107 32	34°55'54"	135°41'26"	19990817～19991201	330㎡	道路新設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第544次）今里遺跡	都城跡 集落跡	長岡京期 旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥～奈良時代 鎌倉時代 安土桃山時代	 包含層 流路 土坑 溝、土坑 溝、掘立柱建物 掘立柱建物 溝	土師器、須恵器 ナイフ形石器 弥生土器、石鏃 土師器、須恵器 土師器、須恵器 瓦器 土師器	右京四条三坊十五・十六町 旧石器単純包含層 初期須恵器 集落環濠か今里城の堀
長岡京跡（右京第580次）今里遺跡	都城跡 集落跡	長岡京期 旧石器時代 奈良時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	溝、土坑 包含層 柵 井戸、溝、土坑 溝 溝、柱穴	土師器 石器剥片 土師器 土師器、瓦器、須恵器 土師器、陶磁器 土師器、陶磁器	右京四条三坊十六町 井戸より大量の遺物
長岡京跡(右京第650次)今里遺跡	都城跡 集落跡	長岡京期 弥生時代 古墳時代 奈良時代前後 鎌倉・室町時代 江戸時代	溝、柵 竪穴住居、土坑 竪穴住居、土坑 柵、土坑 井戸、溝、土坑 溝、土坑	土師器、須恵器、瓦 土師器、石器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、瓦器、須恵器 土師器、陶磁器	四条条間北小路北側溝

図　　版

52

36

50

118

11

45

12

85

44

出土遺物－1

長岡京跡右京第544次調査

113

114

122

33

77

79

55

115

121

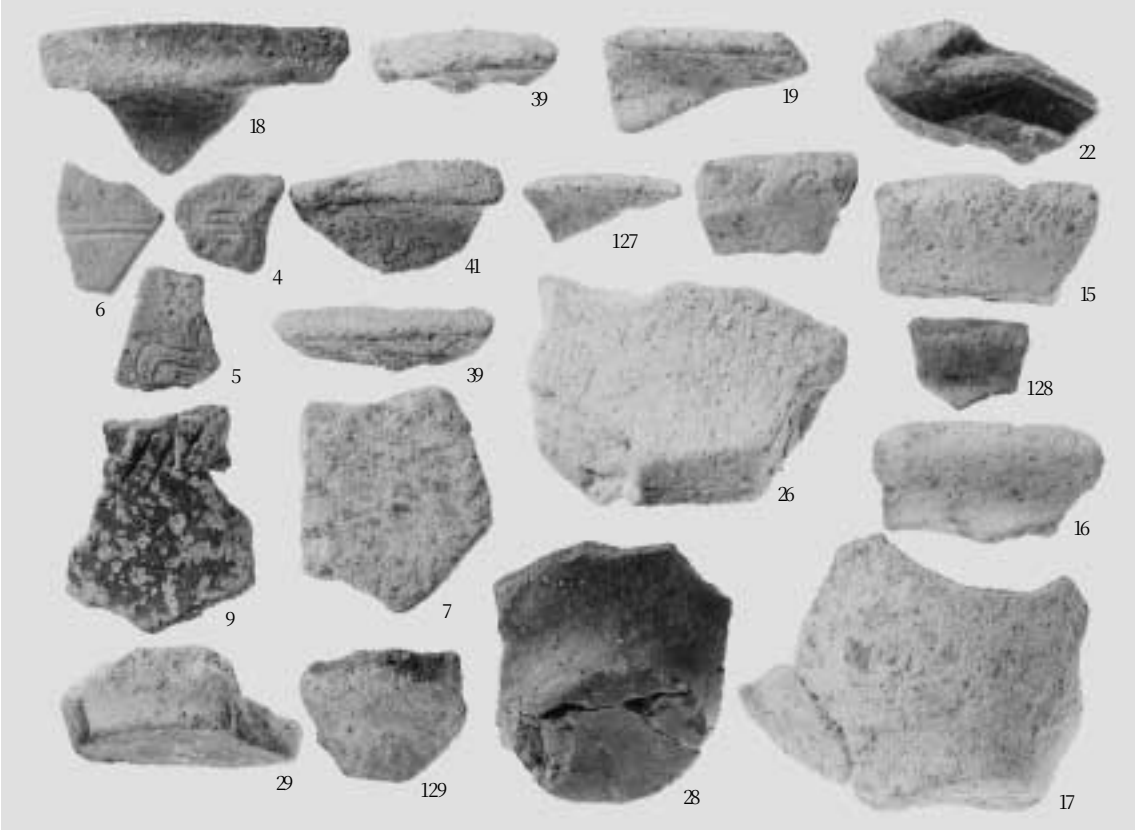
61

78

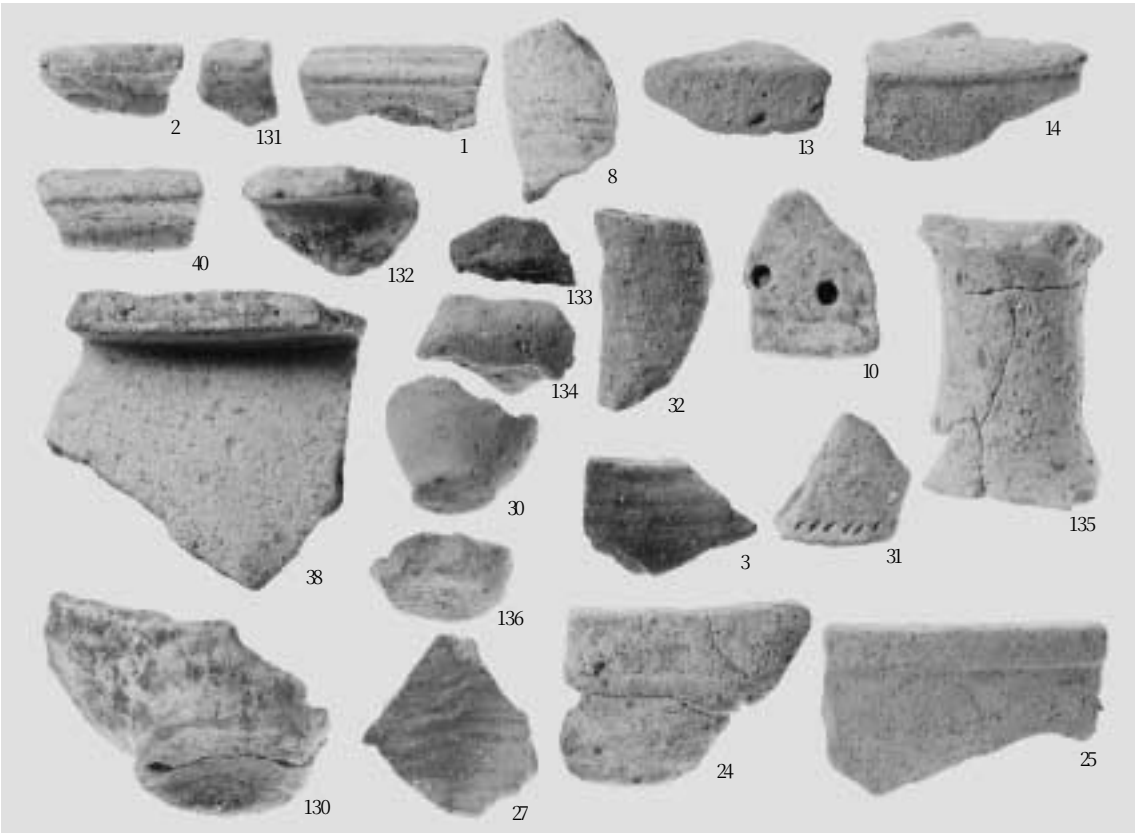
80

112

出土遺物－2

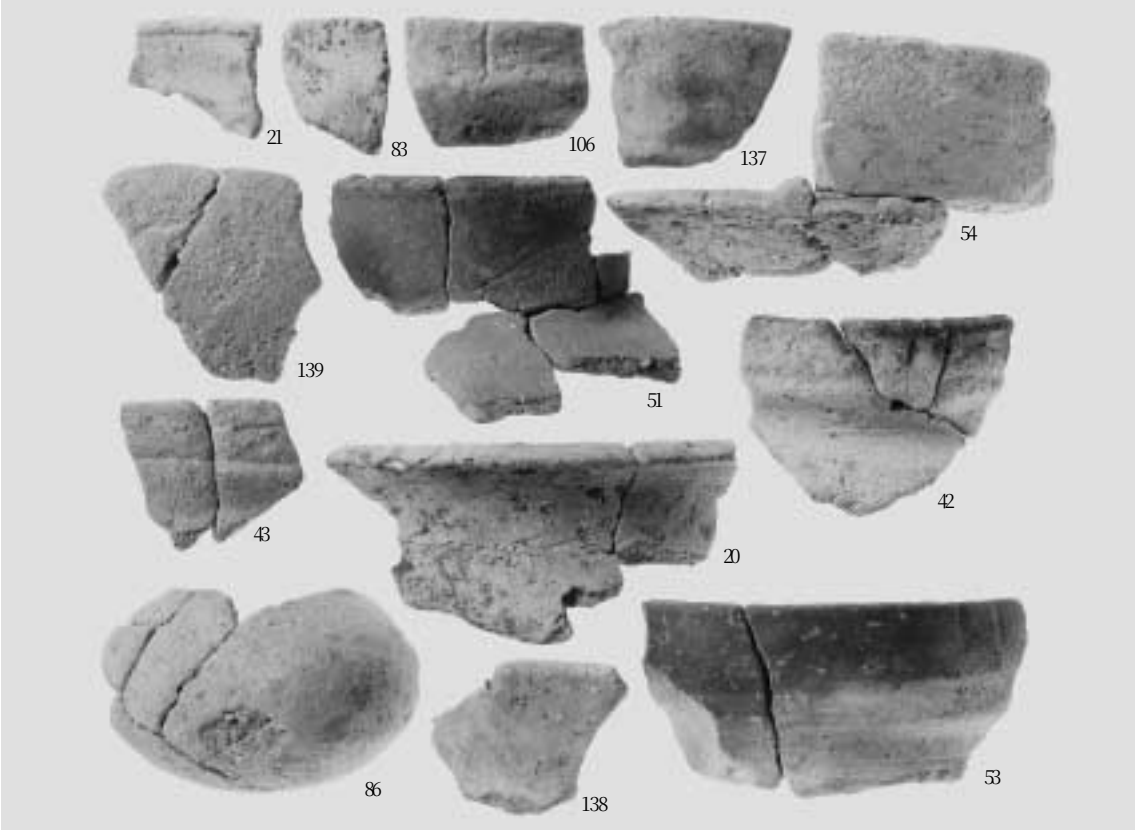


（1）弥生～古墳時代の土器－1



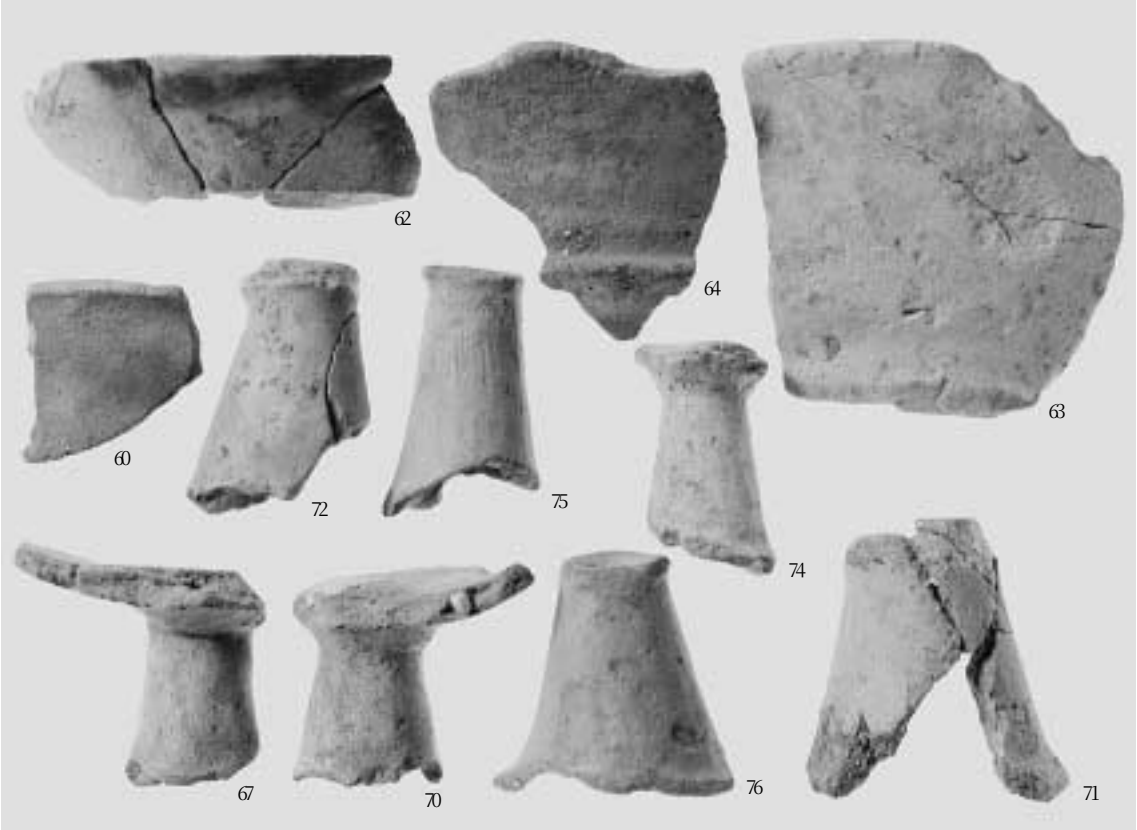
（2）弥生～古墳時代の土器－2

長岡京跡右京第544次調査

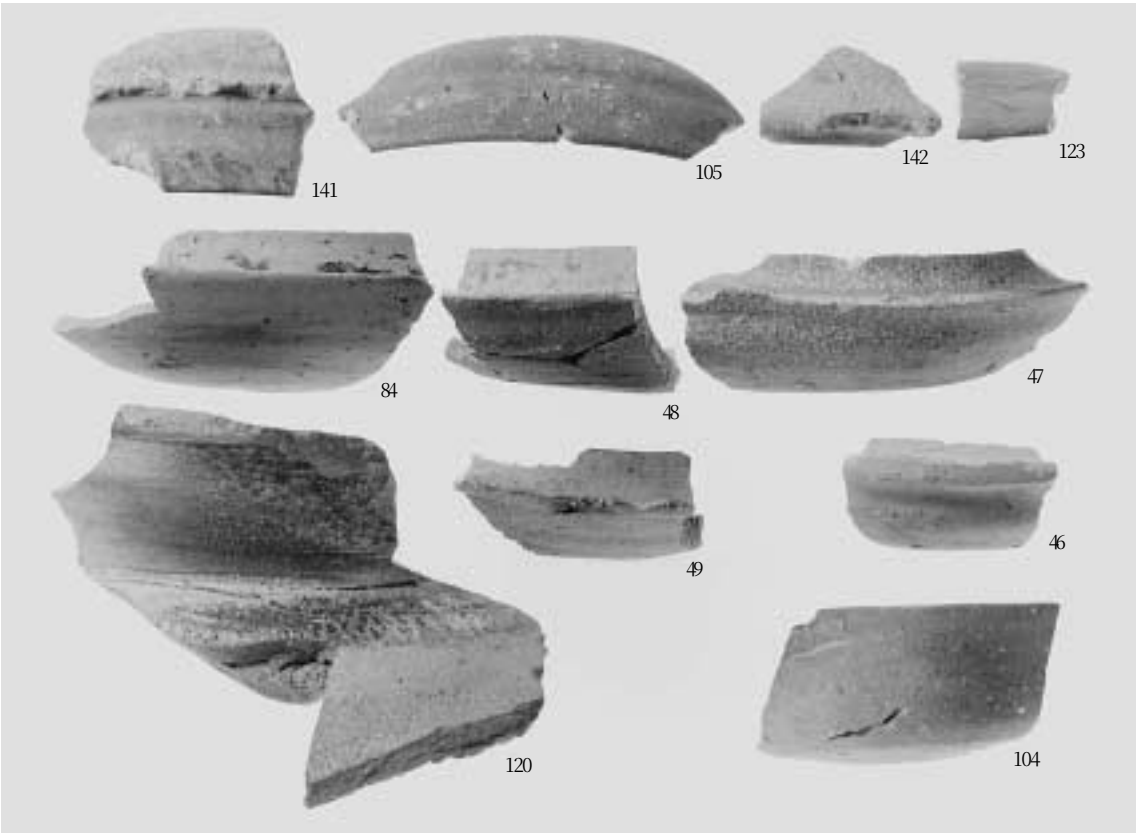


（1）弥生～古墳時代の土器－3

（2）古墳～飛鳥時代の土師器－1

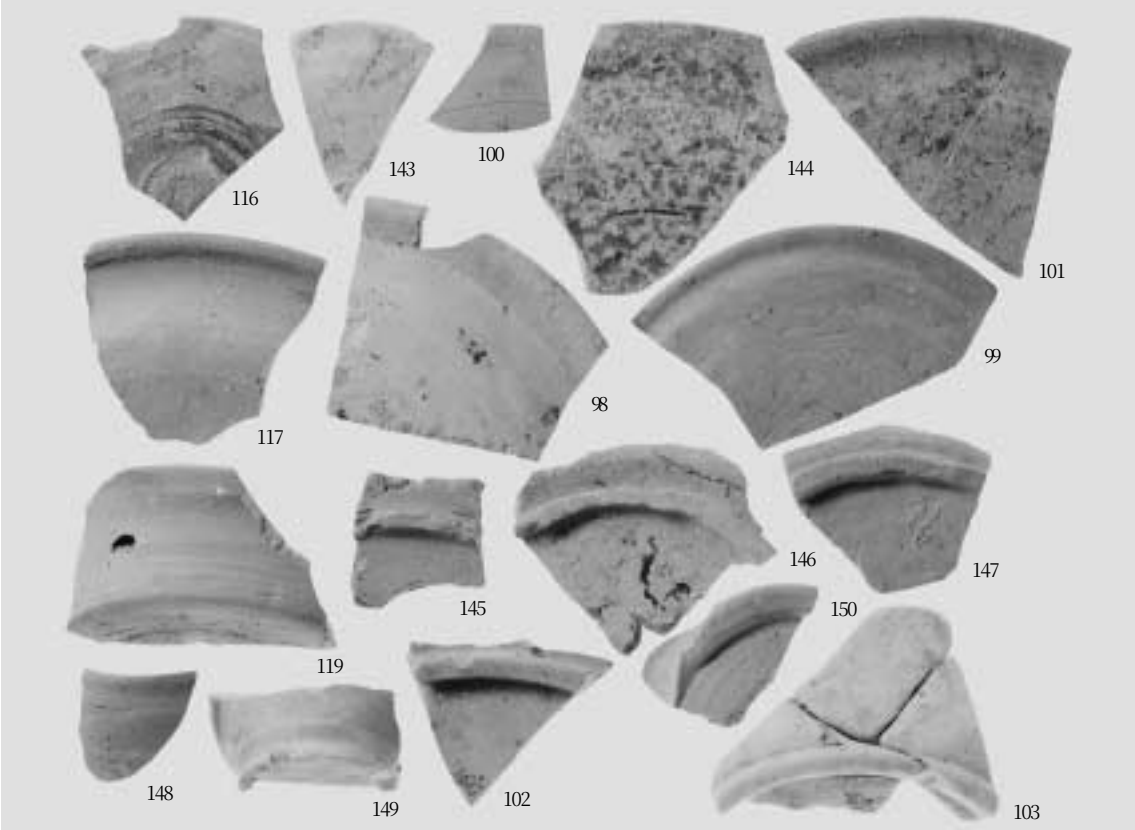


（1）古墳～飛鳥時代の土師器－2

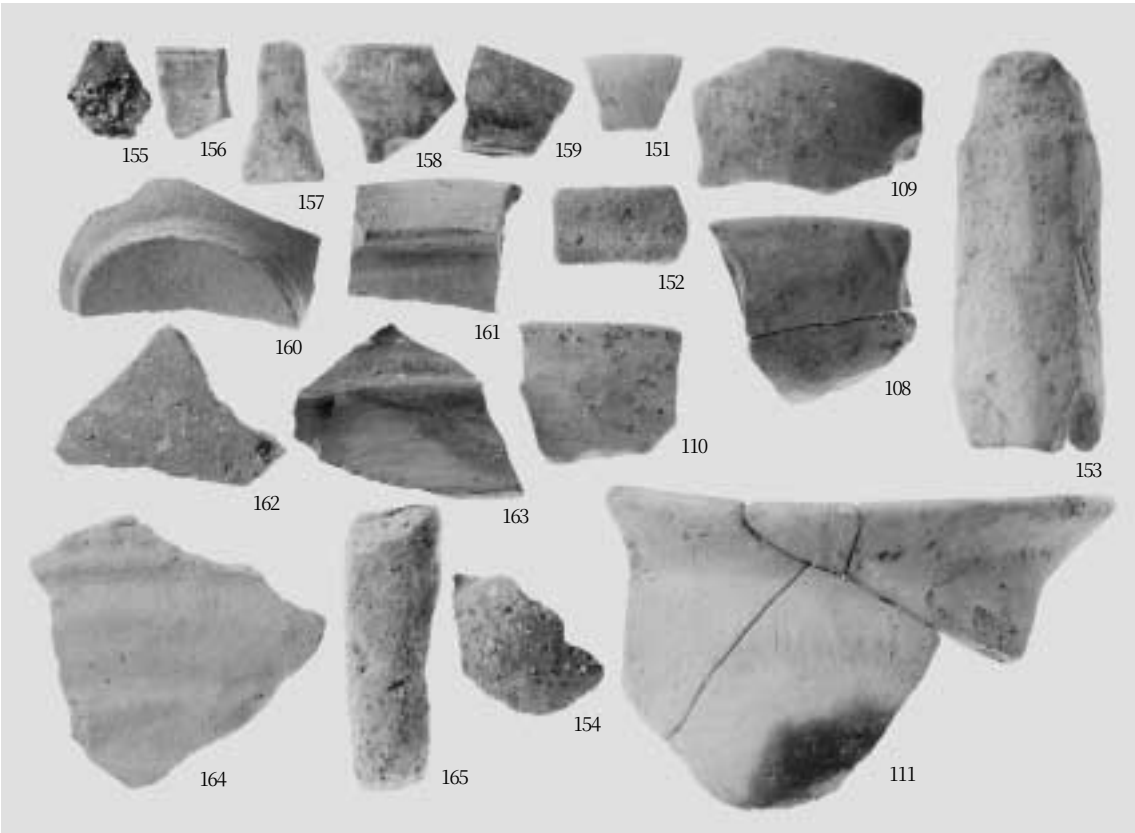


（2）古墳～飛鳥時代の須恵器

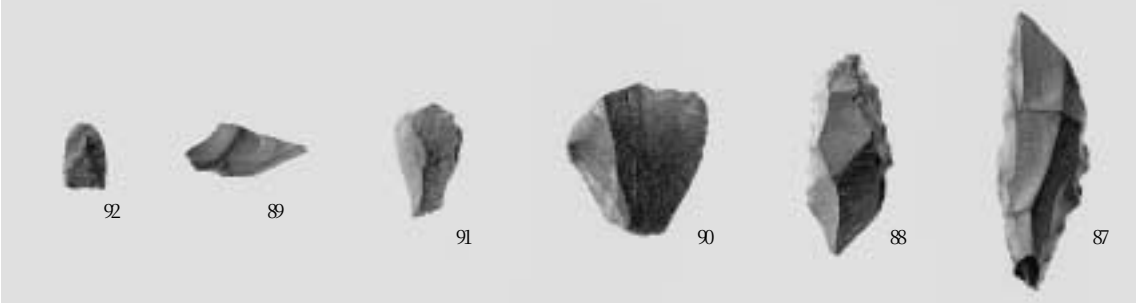
長岡京跡右京第544次調査



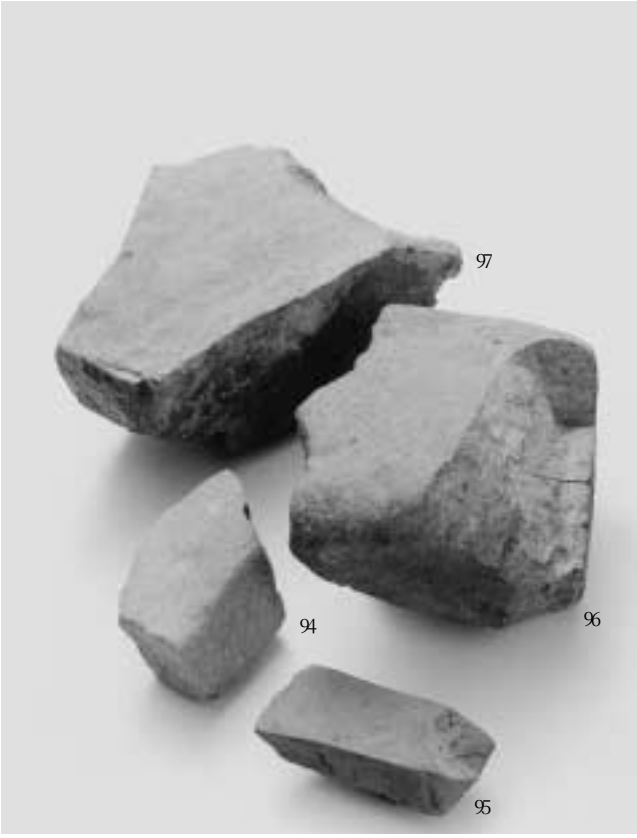
（1）奈良時代～長岡京期の須恵器



（2）長岡京期以後の遺物



（1）石器類・土製品



（2）砥石・軒瓦・銭貨

長岡京跡右京第580次調査

井戸ＳＥ16出土の土師器・瓦器

27

23

25

28

17

37

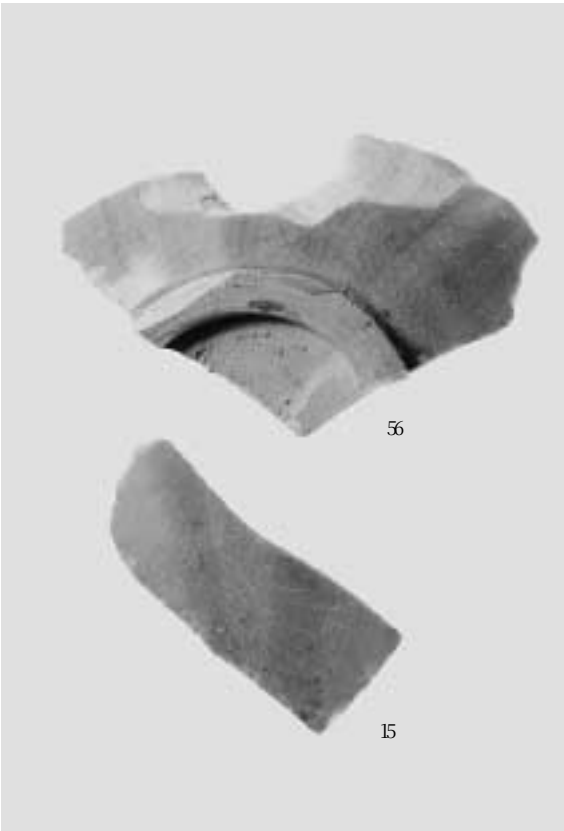
35

36

井戸ＳＥ16出土の瓦器

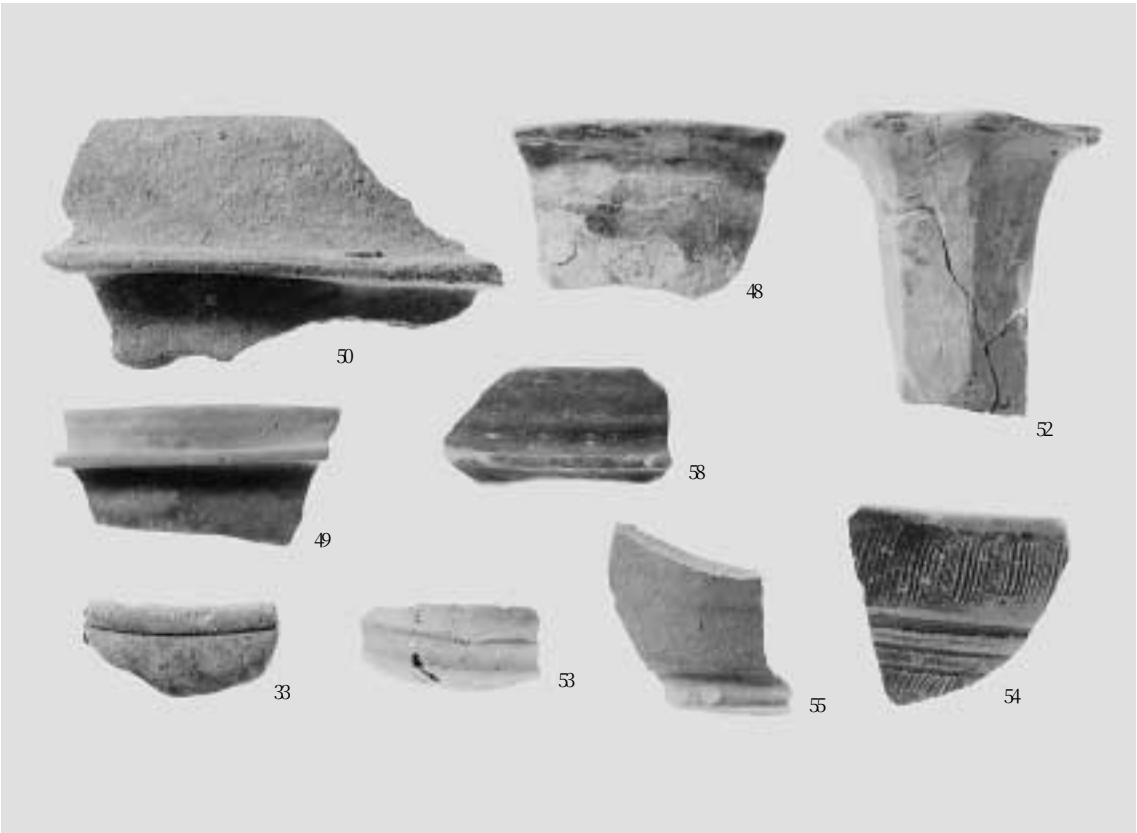
長岡京跡右京第580次調査

（1）井戸ＳＥ16出土の土師器・瓦器・須恵器



（2）井戸ＳＥ16の出土遺物

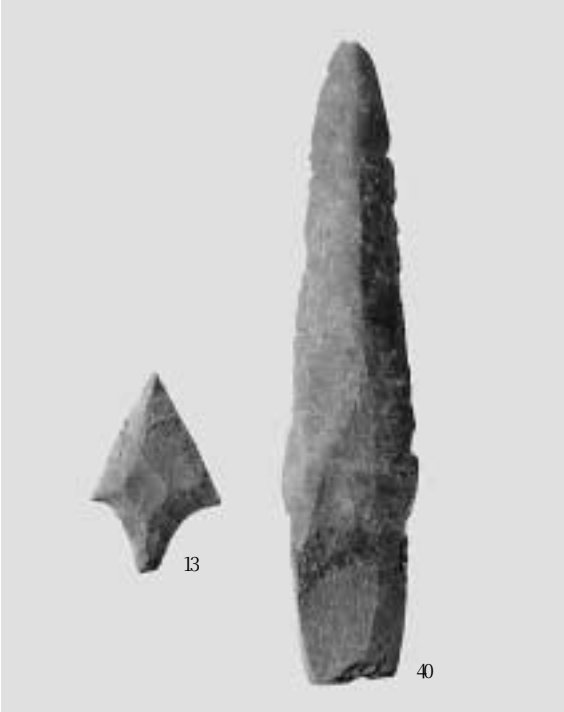
（1）溝ＳＤ19最下層出土の瓦器

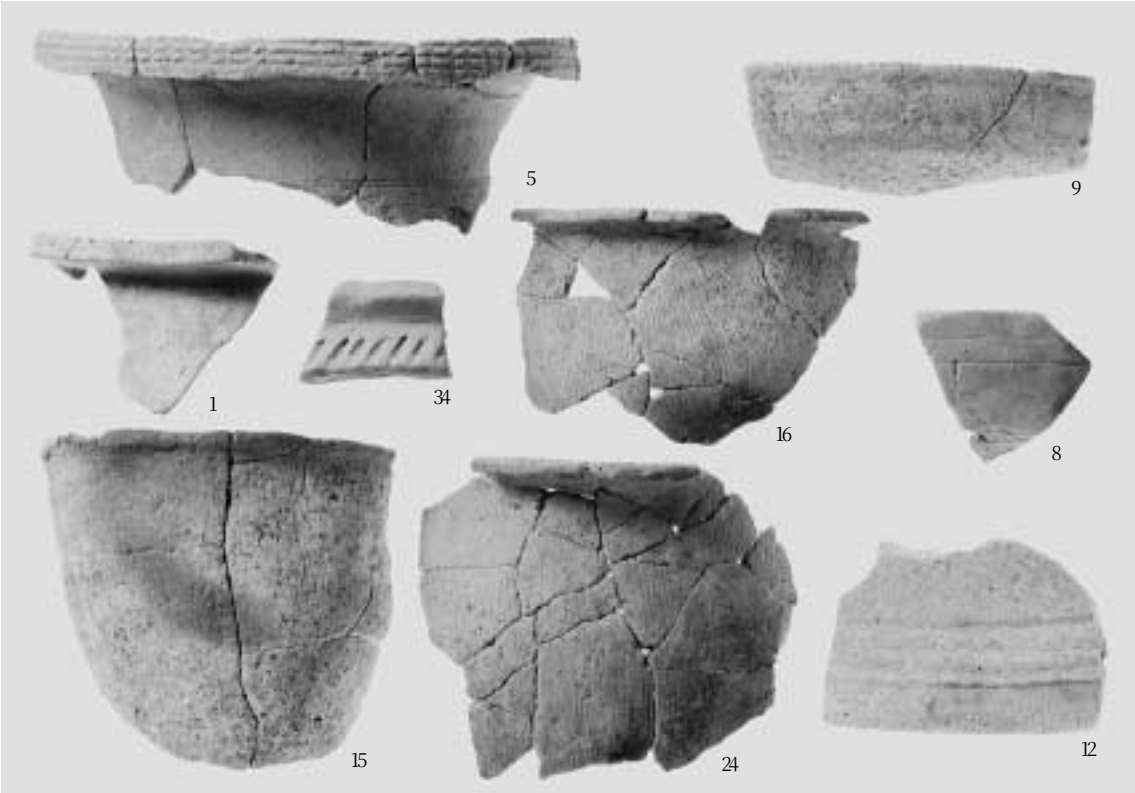


（2）出土遺物

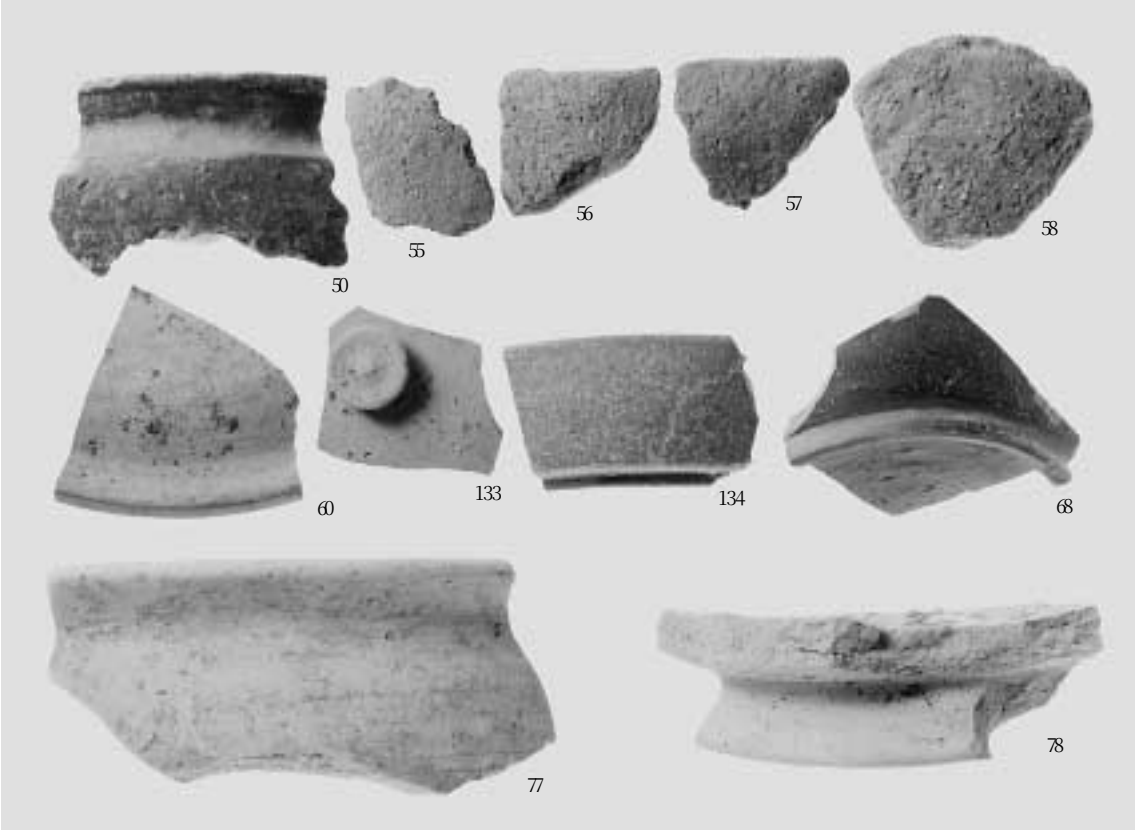
図版一二

長岡京跡右京第650次調査





弥生時代から古墳時代の遺物



（1）溝ＳＤ08出土の土師器・須恵器・製塩土器

（2）土馬　　（3）溝ＳＤ08出土の軒平瓦

長岡京跡右京第650次調査

溝ＳＤ08出土の土師器・須恵器・土錘

81

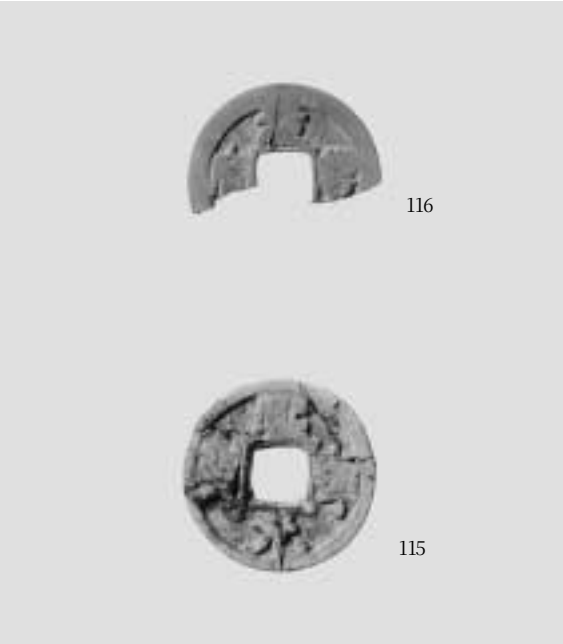
89

90

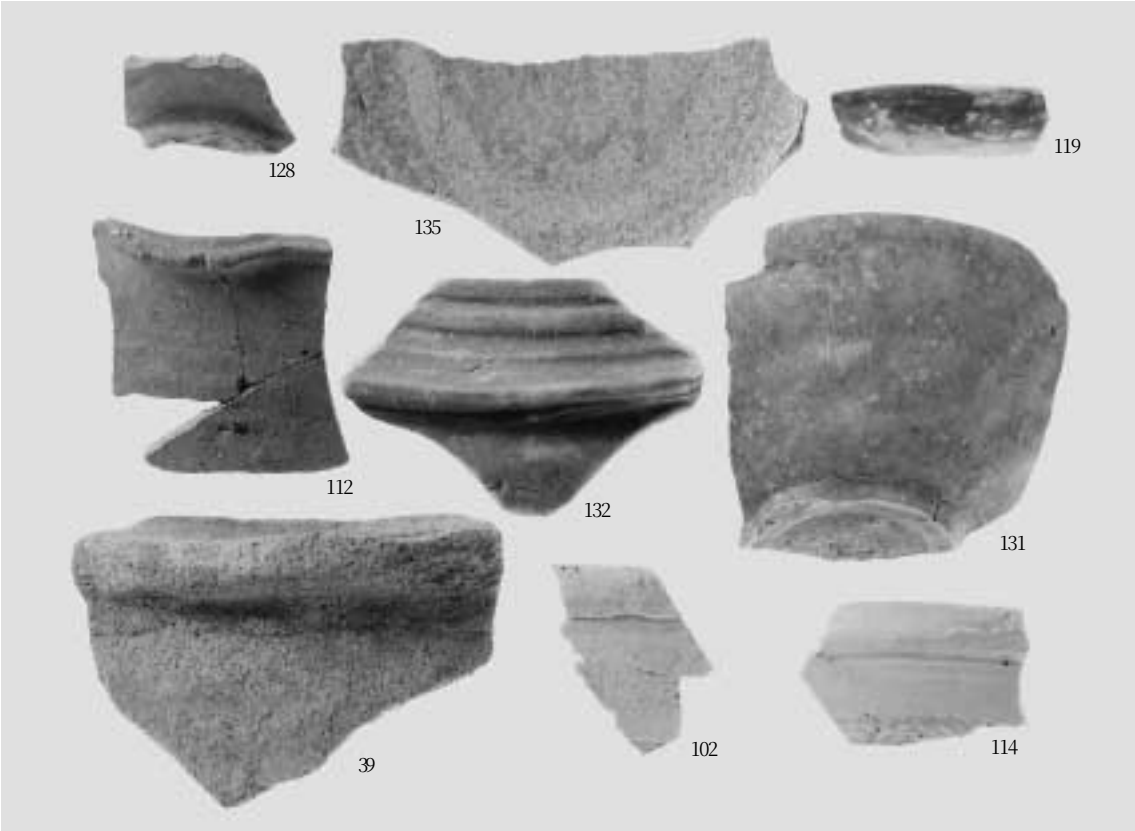
105

127

108


116

115


128

135

119

112

132

131

39

102

114

平安時代から室町時代の遺物

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第１９集

平成12（2000）年11月29日　印刷
平成12（2000）年11月30日　発行

編集発行　財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853
京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622(代)
FAX　075－951－0427
印　　刷　（株）ぎょうせい　関西支社
〒530－8688
大阪市北区天満２丁目７番17号
電話　06－6352－2271(代)
FAX　06－6355－2860